応永本『和泉式部物語』注釈稿（1）

――（1）「夢よりもはかなき世の中」～（6）「暗きほどにぞ、御返りありける」――

渡辺開紀
松島毅
金井利浩
山下太郎
渦巻恵

凡例

一、京都大学蔵『和泉式部物語』（臨川書店・一九七八→【臨川】）所収の影印および翻刻を底本とした。範囲は、一三九～一四六頁とした。

二、全体を〔本文〕〔校訂〕〔応永本校異〕〔三条西本〕〔参考〕〔和歌他出〕〔現代語訳〕〔注釈〕の順に立項した。

三、〔本文〕は底本重視の方針のもと、通読の便をはかり、次の①～⑥の操作を加えた。

①適宜改行をおこない、和歌は二字下げで散文部分と区別して掲げた。

②底本の表記を改め、仮名遣いは歴史的仮名遣いに統一し、句読点・濁点などを加えた。助動詞の「らん」「ん」などは、それぞれ「らむ」「む」などに統一した。

③底本の表記に漢字を宛て、あるいは漢字を仮名に改めた。活用語の語尾や、漢字表記の送り仮名が不足するところは適宜補った。また、補助動詞として用いられた「給ふ」「侍り」などは、仮名書きに統一した。
④読みにくい漢字にはふりがなを付けた。ただし、「四月」「御」など読み方が定まらない語句は、そのままにした。
⑤会話や手紙の部分は「　」で括り、必要に応じ『　』などの記号を用いた。ただし、心内文や和歌だけの場合には「　」を付けていない。
⑥文意不通などによって校訂が避けられないと判断された箇所には「＊」を付した。また、校訂は避けたが、底本の本文において疑問を残す箇所には「※」を付した。

四、〔校訂〕は、本文中の「＊」を付した箇所を掲出し、校訂の根拠や相応の事由等を説明した。また「※」を付した箇所を掲出し、その本文に従った事由を示した。

五、〔応永本校異〕は、底本（京）と鈴木一雄・伊藤博編『影印本　和泉式部物語』（新典社・一九六八→（書））との異同についてのみ、原表記のまま示した。（書）は、底本と同じ応永本系統の写本の一つと想定され、宮内庁書陵部蔵である。

六、〔三条西本〕〔参考〕は、底本と他系統との校異の確認の便をはかり、次の三書の頁数のみを明記した。
〔三条西本〕【清水】→清水文雄『和泉式部日記』（岩波書店・一九八一、頁数は算用数字。）
〔参考〕【本文篇】→吉田幸一『和泉式部全集　本文篇』（古典文庫・一九五九、頁数は漢数字。）
【本文集成】→岡田貴憲・松本裕喜編『『和泉式部日記／和泉式部物語』本文集成』（勉誠出版・二〇一七、頁数は算用数字。）

七、〔和歌他出〕は、『勅撰集』と『和泉式部集』のみに限り掲げた。検索の便をはかり、次の①～③の操作を加えた。
①『勅撰集』は『新編国歌大観』（角川書店・古典文学ライブラリーＷＥＢ版）の歌集名・歌番号に拠る。
②『和泉式部集』は『私家集大成』（明治書院・古典文学ライブラリーＷＥＢ版）の歌番号に拠る。歌集名は、同本解題に基づき『和泉式部集Ⅰ（正集）』『和泉式部集Ⅱ（続集）』『和泉式部集Ⅲ（宸翰本）』『和泉式部集Ⅳ（松井本）』『和泉式部集Ⅴ（雑種本）』と記した。
③歌句の異同や詞書などを取り上げる場合は〔注釈〕において説明を加えた場合がある。

八、〔現代語訳〕は、底本の語順通りの逐語訳を原則とし、ことばを補う場合は（　）を用いた。

九、〔注釈〕は、底本の全文に言及することを目指した。注記項目の見出しは、括弧や句読点を含めて〔本文〕のままの形で掲出した。底本の独自性だけでなく、他本との差異において注意すべき点などの問題も取り上げ、『和泉式部物語』『和泉式部日記』総体の読解・鑑賞に資するよう心がけた。なお、他本との差異を示す場合は、底本のことを「底本」「応永本」とし、それ以外の他本については「三条西本」「寛元本」「群書類従本」などと記した。

十、〔注釈〕において多く用いた注釈書・研究書の略称は次の通りである。著者の敬称は略し、刊行年は西暦で示した。

〔注釈書略号一覧〕

【竹野】竹野長次『校定和泉式部日記新釈』（精文館・一九三〇）
【詳解】小室由三 田中栄三郎『和泉式部日記詳解』（白帝社・一九三七）
【昭完】五十嵐力『昭和完譯　和泉式部日記』（白鳳出版社・一九四七）
【木枝】木枝増一『和泉式部日記』（修文館・一九四七）
【新註】玉井幸助『和泉式部日記新註』（世界社・一九四九）
【川瀬】川瀬一馬『和泉式部日記（新註国文学叢書）』（講談社・一九五六）
【最新】山岸徳平 村上治『和泉式部日記（最新国文学解釈叢書）』（法文社・一九五六）
【大系】遠藤嘉基『和泉式部日記（日本古典文学大系）』（岩波書店・一九五七）
【考注】尾崎知光『増訂　和泉式部日記考注』（東宝書房・一九五七）
【朝日】山岸徳平『和泉式部日記（日本古典全書）』（朝日新聞社・一九五九）
【全講】円地文子 鈴木一雄『全講和泉式部日記』（至文堂・一九六五）
【全集】藤岡忠美『和泉式部日記（日本古典文学全集）』（小学館・一九七一）
【狩野】狩野尾義衛『対校　和泉式部日記新釈』（白帝社・一九七三）
【新書】鈴木一雄『全対訳　和泉式部日記』（創英社・一九七六）
【講談】川瀬一馬『和泉式部日記（講談社文庫）』（講談社・一九七七）

【学術】小松登美『和泉式部日記 全訳注（講談社学術文庫）』（講談社・（上）一九八〇、（中）・（下）一九八五）
【集成】野村精一『和泉式部日記　和泉式部集（新潮日本古典集成）』（新潮社・一九八一）
【清水】清水文雄『和泉式部日記（岩波文庫　改版）』（岩波書店・一九八一）
【改全】円地文子・鈴木一雄『全講和泉式部日記　改訂版』（至文堂・一九八三）
【完訳】藤岡忠美『和泉式部日記（完訳　日本の古典）』（小学館・一九八四）
【平田】平田喜信『和泉式部日記（影印校注古典叢書）』（新典社・一九八六）
【今井】今井卓爾『和泉式部日記　訳注と評論』（早稲田大学出版部・一九八六）
【ほる】三田村雅子『和泉式部日記（日本の文学・古典編）』（ほるぷ出版・一九八七）
【由良】由良琢郎『和泉式部日記全釈』（明治書院・一九九四）
【新編】藤岡忠美『和泉式部日記（新編日本古典文学全集）』（小学館・一九九四）
【中嶋】中嶋尚『和泉式部日記全注釈』（笠間書院・二〇〇二）
【角川】近藤みゆき『和泉式部日記（角川ソフィア文庫）』（角川書店・二〇〇三）
【笠間】岩佐美代子『和泉式部日記注釈［三条西家本］』（笠間書院・二〇一三）
【試作】「『和泉式部日記』解釈大成（試作）」（「日記文学研究誌」21、二〇一三・3）※今号のみ。
【新訳】島内景二『新訳和泉式部日記』（花鳥社・二〇二〇）

〔研究書略号一覧〕

○遠藤『新講』…遠藤嘉基『新講和泉式部物語』（塙書房・一九六二）
○吉田『研究』…吉田幸一『和泉式部研究　一』（古典文庫・一九六四）
○森田『論攷』…森田兼吉『和泉式部日記論攷』（笠間書院・一九七七）
○伊藤『伝本攷』…伊藤博『和泉式部日記伝本攷』（桜楓社・一九八一）
○清水『研究』…清水文雄『和泉式部研究』（笠間書院・一九八七）

○森田『第二』…森田兼吉『和泉式部日記論攷　第二』（笠間書院・一九八八）
○伊藤『研究』…伊藤博『和泉式部日記研究』（笠間書院・一九九四）

十一、〔注釈〕に底本の本文を引用する際は、原則、【臨川】に拠り、底本の原表記のまま示した。
十二、〔注釈〕に三条西本本文を引用する際は、原則、【清水】の本文に拠った。
十三、〔注釈〕に他作品を引用する際は、勅撰集は『新編国歌大観』（角川書店）、私家集は『私家集大成』（明治書院）、散文作品は『新編日本古典文学全集』（小学館）所収のテキストに拠り、他のテキストを用いた場合はそのつど明記した。『和泉式部集』に関しては『和泉式部集Ⅰ（正集）』→正集、『和泉式部集Ⅱ（続集）』→続集との略称を用い、その他の歌集名・作品名も通行の範囲で略称を用いた。なお、執筆者の判断により引用テキストの表記を改めたところもある。

（1）夢よりもはかなき世の中

〔本文〕

和泉式部物語（外題）

夢よりもはかなき世の中を嘆きつつ明かし暮らすほどに、はかなくて四月にもなりぬれば、木の下暗がりもていく。端の方をながむれば、築土の上の草の青やかなる、人はことに目とどめぬを、あはれにながむるほどに、近き透垣のもとに人のけはひのすれば、誰にかと思ふほどに、さし出でたるを見れば故宮に候ひし小舎人童なりけり。

（【臨川】二オ／一三九頁）

〔校訂〕ナシ
〔応永本校異〕（京）あをやかなる―（書）あおやかなるをも
〔三条西本〕【清水】11頁　〔参考〕【本文篇】一頁・【本文集成】1～5頁
〔現代語訳〕
夢よりもはかない男女の仲を嘆きに嘆いて日々を明かし暮らすうちに、あっけなく四月にもなってしまったので、木々の下の陰りも次第に

増していく。敷地の隅のほうを眺めると、築土塀の上の青々と生い茂る草、誰もことさら目を留めない雑草を、しみじみ身に沁みて眺めていると、近くの透垣の付近に人の気配がするので「誰かしら」と思っているうちに、（簾で仕切った向こうに）覗かせた姿を見てみると故宮にお仕えしていた（旧知の）小舎人童なのであった。

〔注釈〕

1・和泉式部物語　京都大学蔵本の外題である「和泉式部物語」は、『和泉式部日記』という作品名の別称の一つ。この作品の古写本に多く用いられている題号として知られる。しかし、この題号がどのような意味で使用されているのかは不明である。「和泉式部／物語」と分けられそうだが、「和泉式部」の部分が、この作品の作者を指しているのか、作品の主人公か、あるいは語り手なのか、明確な文脈がないために解釈が分かれる。同様に「物語」の部分も、一般的なジャンル名称を意識してのものか、特定の「物語」を意識して使用しているのか、または「日記」「歌集」に対する概念なのか、複数の可能性がある。このような状況から、「和泉式部物語」という題号の語義は未詳とするのが適切といえる。本作品に限らず古典作品の別称や題号の相違については、複数の写本が存在する場合には珍しくない。しかし、どちらが本来的な作品名かを判定するのは困難が伴う。ただし、そうした場合は写本の享受のありようを踏まえ、作品名や題号の持つ意味を検討する余地はある。本作品に関して言えば、古くは「無題号」あるいは「和泉式部」であったものが、作品享受の段階で「和泉式部物語」と「和泉式部日記」とに分岐し、今にいたるとする仮説がある（【新註】、吉田『研究』）。その推定があたっているなら、「物語」の名を有する写本が多いからと言って、その事実を過大視せずに題号を作品の性格規定や分析に関わらせない立場が出てくる。一方で、いわゆる「物語」としての受容が反映していると見るのなら題号に相応の重みを持たせる立場もあり得る。いずれにしても「和泉式部物語」という題号は謎が多く残されている。この題号がつけられた一本の写本を通じて、この作品がどのような可能性を秘めているのか、本注釈で多く話題としていく。

2・夢よりもはかなき世の中を　はかないものに喩えられる夢よりも、さらにあっけない世の中、の意。そのように「世の中」と感ずる人物が誰なのか、この段階ではまだ判然としない。「世の中」が男女の仲の意か、広く人生の意なのかもおぼろげである。どうして「夢よりもはかなき世の中」という思いを抱えているのかといった疑問が読解の牽引力になる起筆の書きぶり。当座、「夢よりもはかなき」の用例が極端に限られ、ましてそれが「世の中」に結びつく表現が当該箇所にしか見あたらない事実に注目する。「夢よりもはかなき」は、【考注】が「夢よりもはかなきものは夏の夜の暁がたの別れなりけり」（後撰集・一七〇・夏・壬生忠岑）、「夢よりもはかなきものは陽炎の仄かにみてし影

にぞありける」（拾遺集・七三三・恋二・よみ人しらず）の二首を引歌とする。それに対し【全講】は『和泉式部集』から「露よりも世のはかなきことを人のいふをききて／草の上の露にたとへし時だにもこはたのまれじまぼろしの世か」（正集・一七六、続集・二四七）、「みるほども夢もたのまるはかなきは……」（正集・二六九、三六八）、「うつつこそはかなりけり夢をだに……」（正集・八六七）、「みる夢もかかりどころはあるものを……はかもなき身は」（続集・四九一）を挙げ、「『家集』の基調と『日記』の起筆とは、人生のはかなさをただよわせる発想という点で共通地盤に立つのであり、ことさらに「夏の夜の暁がたの別れ」「（陽炎の）ほのかにみてし影」を必要としない」とする。また小町谷照彦は、「和歌的秩序」という術語で「歌ことば」の伝統と価値観が本作品冒頭部に反映しているとみて、より多くの和歌を縦横に渉猟している（「和泉式部日記の方法」「国文学」一九六九・5）。これらを呼び水に注釈書の多くが和歌の博捜に努め、『歌ことば歌枕大辞典』（角川書店・一九九九）の「夢の世」（川村晃生執筆）および「はかなし」（工藤重矩執筆）なども参照されたい。起筆が和歌の措辞を利用している蓋然性が見極められていると言える（今西祐一郎「仮名日記の冒頭」『日本文学研究ジャーナル』22、二〇二三・6）。

3・嘆きつつ明かし暮らすほどに、「つつ」は反復・継続で、嘆いてはまた嘆き、の意。この箇所、三条西本は「嘆きわびつつ」という独自異文を有する。この校異について、【角川】は「為尊の死から約一年の時間を、女は茫然自失のうちに過ごしていたことがこの言葉（＝「嘆きわぶ」にはよくあらわれていると言えよう。応永本では「なげきつつ」となっており、こうした言葉の特殊性は薄れている」とし、「嘆きわぶ」の特殊性から女の「遁世感」に迫る実践もある（渡辺開紀「『和泉式部日記』における遁世感の意義」「國學院大學大学院紀要」39、二〇〇七・3）。三条西本に読み慣れた目には、底本「嘆きつつ」が平板に映るが、一方で「嘆きつつ」もまた和歌表現史に多くの用例がある。三代集の入集歌には、「たのまれぬうき世中を嘆きつつ日かげにおふる身を如何せん」（後撰集・一一二五・雑二・在原業平朝臣）「嘆きつつ独ぬる夜のあくるまはいかにひさしき物とかはしる（拾遺集・九一二・恋四・右大将道綱母）、「うき世にはある身もうしとなげきつつ涙のみこそふるここちすれ」（拾遺集・一三〇六・哀傷・藤原朝光）があり、「嘆きつつ明かし暮らす」の類似表現に「なげきつつ暮らし明かせば秋風ののこりいくらもなくなりにけり」（嘉言集・五五）、「なげきつつ明かし暮らせばほととぎすみのうのはなのかげになりつつ（『蜻蛉』遠度）という歌もある。上記の和歌を引歌とするには及ばないものの、和歌表現史「嘆きつつ」の系譜に、起筆を覆う悲嘆表出を連ねてみる余地はある。ちなみに、伊藤『伝本攷』に拠ると、本作品の校異の概算値は、底本の応永本系統と三条西本との間には約一三〇〇、独自異文については、応永本・六五七箇所、三条西本・六一〇箇所を数えるという。

4・はかなくて　「はかなくて」は三条西本には見えない一句。応永本の形は「夢よりもはかなき世の中」とあって、すぐに「はかなくて」という同じ語句がでてくる。このような形を「同語反復」と仮称しておく。「同語反復」が応永本本文には頻出するという事実、ならびに当該の一句の有無に対する認識は研究者の間で一致していない。鈴木知太郎『和泉式部日記』（古典文庫・一九四八）が、この一句を引き合いに「三條西家本は比較的表現が簡潔」であるのに比べ、応永本は「表現が稍々冗漫で平板」という否定的な評価を下している。作品全体を俯瞰すると、三条西本が「同語反復」であるのに応永本がそうでない箇所も散見するが、応永本の「同語反復」ばかりが、文章の拙さ、説明的で冗漫あるいは後人の補筆、さかしらなどと評価されがちである（【笠間】「解説」など）。一方、森田『論考』は、系統論の観点からは応永本「はかなくて」がある本文が「原型」、三条西本に「添削意識」を認めるべきだと主張する。「同語反復」が本作品の作者とされる和泉式部の歌によく出てくることを重視する意見も少なくない。これら論考は種々に考慮すべき点があるが、局所的な「同語反復」に新旧優劣を見定めていく方法には限界も感じられる。作品読解上の「はかなくて」の試解は、次項「四月にもなりぬれば」を参照。

5・四月にもなりぬれば、　前項「はかなくて」に続く一節。「はかなくて」の用例には「はかなくて正月にぞなりぬるかし」（『蜻蛉』）、「はかなくて日ごろは過ぎゆく」（『源氏』総角）ほか、本作品には「猶ひとりなかめゐたるほとにはかなくてあけぬ」（【臨川】一五五頁）などがある。「四月」は「しぐわち」とも「うづき」とも訓む。「なりぬれば」は、当該例を含め応永本に3例あり、「八月にもなりぬれは」（【臨川】一六二頁）、「きりたる空をなかめつゝあかくなりぬれは」（【臨川】一六六頁）とある。「はかなくてなりぬれば」は、底本の時間的推移に関する表現の一つと位置づけたい。また、【大系】〔補注一〕が「夢よりもはなかき世の中」の「はかなし」を例に、「『はかなき』が「世の中」の客観的な属性を示すと共に、「世の中」への、「言語主体の情意をも示していることに注意したい」とする指摘を踏まえ、底本の文脈に置かれた「はかなくて」の内実に踏みこんだ解し方を三通り提示する。一つ目は、「夢よりもはかなき世の中」と悩める人物は、時間の感覚を失っていたのであり、時間の流れも同様にあっけなく感じられる、ということ。二つ目は、他の異性との関係などを含む新たな出来事は何もなくて、ということ。悩める人物に接近しようとする存在があったかどうかは不明だが、あったとしても応ずることはなかっただろう。後段（4）の〔注釈〕21～23に拠ると、この時点までに他の人間と交際がなかったように語られている。三つ目は、「夢よりもはかなき世の中を嘆きつつ明かし暮ら」している人物にとって、その営みが実感として、虚しくて、ということ。これは、「はかなく四月に」ではなく「はかなくて●四月に」とある点に着目する観点から、「…明かし暮らすほどにはかなくて、四月にもなりぬれば木の下暗がりもていく」という構文と

して理解することを前提とする解釈である。その場合、「…明かし暮らしていると虚しくて、四月にもなってしまうと木の下は次第に暗くなっていく」と解し得る。その構文が指し示しているのは、一つには、前半の虚無と後半の暗澹という負の共存並立、もう一つは、前半の人為の再生不能と後半の自然の循環という普遍的対立の図式である。

6・木の下暗がりもていく。「はかなくて四月になりぬれば」という思いを抱えている人物の人為が表現されていたのに続き、自然界の運行が表現として浮上してくる叙述のありように注意。「木の下暗がり」は【試作】で「旧暦四月は今の五月で、新緑の季節。ここはその頃の、木々が茂って、木の根本が暗くなる現象」と注し、古典では「木の下闇」などと表現すると注した。補足すると、この表現の淵源は『万葉集』の「木暗茂」（二五七、四〇五一）あたりかと考えられるが、勅撰集で「木の下闇」を詠む和歌が見えはじめるのは『拾遺集』からとなる。「さ月山木の下闇にともす火はしかのたちどのしるべなりけり」（拾遺集・一二七・夏・貫之）、「ゆくすゑはまだとほけれど夏山の木の下陰ぞたちうかりける」（一二九・夏・躬恒）ほか、三四〇（別・公任）、八八一（恋四）などがある。『和泉式部集』には「同月（＝五月）の十余日に、月のいとあかきに／水無月は木の下闇とき、しかど五月もあかきものにぞありける」（続集・一七八）があり、【学術】【角川】は「日暮るれば下葉こぐらき木のもとのもの恐ろしき夏の夕暮れ」（好忠集・一一九・四月終）を指摘する。

7・端の方をながむれば、【試作】「三条西本には見えない一節」と注した。応永本の場合は、後文「あはれにながむるほどに」とあり、「ながむ」の語が同語反復。「端の方」は次項の「築土」の位置を指示するための語。【試作】で「【竹野】【詳解】【川瀬】【講談】が縁側の付近。【昭完】が敷地の地境。【由良】は、普通は縁側と言いながら、ここは「庭の隅」とする」と注を踏襲し、本稿では「敷地の隅のほう」と現代語訳した。「端の方」という言い方は底本では当該例のみだが、同時代作品に他に「端の方」15例・「端つ方」6例が見出せる。

8・築土の上の草の青やかなる、人はことに目とどめぬを、あはれにながむるほどに、【試作】「**10、築土の上の草青やかなるも**」とあるのを、「**10、築土の上の草の青やかなる**」と訂正する。「築土」は邸の周囲に張り巡らされた築土塀（築地塀と表記するのが一般的）。その構造は「木柱を立てて板をそえ泥土を塗る固めた塀」（【最新】）か、「この時代のものは、土をもりあげただけ」（【全講】）か、いくつかの説があるが未詳。「草の青やかなる」の「の」は同格。「草の青やかなる（草）」と補い、この句じたいは「あはれにながむる」に係る。「人はことに目とどめぬ」は準体法で、こちらも「人はことに目とどめぬ（草）」と補う。以上に基づき、ここの文章構造を図式化すると、

端の方をながむれば
築土の上の草の（A）青やかなる（草）
（B）人はことに目をとどめぬ（草）
をあはれにながむるほどに

となり、「築地の上の草」を（A）（B）で詳述し、さらに（A）（B）が同格的な関係をなして「を」に続くと押さえたい。「～をあはれに」の「を」は格助詞。別解（B）「人はことに目とどめぬを」の「を」を間投助詞、もしくは逆接の接続助詞ととるなら、「人はことに目とどめぬを」は「挿入句」（【大系】）との見方も成り立つ。「築地の上の草」に対する感慨については、後項「故宮に」を参照のこと。

9・近き透垣（すいがい）のもとに　沢田名垂『家屋雑考』、関根正直『宮殿調度図解』に基づき、【全講】は「透垣」を「「すきがき」の音便。板か竹を縦にならべてつくり、間を透かした垣。竹や柴をあらく編んでつくったませ垣やま垣（籬）とは違う」と説明する。十月下旬ごろの場面に「ちかきすいかいのもとにをかしけなるまゆみのすこしもみちたるを」（【臨川】一八〇頁）とあるが、それとこことが同一か別物かまでは判別できない。「透垣」の絵画史料としては『源氏物語絵巻』「橋姫」「鈴虫」など参照。

10・人のけはひのすれば、誰（たれ）にかと思ふほどに、「人のけはひ」は、人のいる気配の意。【学術】が「童も身分低くしかも年少な者の気楽さで、それこそ築土の崩れから勝手知った庭の奥へはいりこんでしまった」とするが、童が年少の者かどうかは疑わしく、「築土の崩れ」なる語は本文に出てこない。なお、このあたりの描写は、作品中盤の石山詣でとの類似が顕著である（【臨川】一六六頁）。

11・さし出でたるを見れば　三条西本が欠く部分。「さし出づ」の「さし」は接頭語。「さし出でたる（姿・顔）を」の意で解した。「（姿・顔）さし出でたる（の）を」の意にも解せる。何者かが陰から顔を覗かせた、あるいは姿を現した状況を言う。江戸時代の板本の「挿絵」や【詳解】に、この部分に対応する図柄がある。そこでは女性と童とが室内で対面する構図だが、童が簀子に上げられたことは本文からは確定できない。童の身分の低さを考えると、簀子にあがることも、貴族女性と面と向かって対座することも考えにくい。挿絵が平安時代の実態と合致しないことはよくあることなので、参考にする際には注意が必要である。本作品の板本については、岡田貴憲「『和泉式部物語』絵入り板本考」（「国文学研究資料館紀要」46、二〇二〇・3）参照のこと。

12・故宮（こみや）に　【試作】「亡くなった宮。この時点では主人公とどういう関係の、誰のことかが分からない」と注した後に、作品内外の徴証や、

当時の読者の予備知識を主張する藤岡忠美の意見に従い、冷泉天皇の第三皇子為尊親王に比定する。本稿も「故宮」は史実のうえでは為尊と解する。為尊は長保四年（一〇〇二）六月十三日、二十六歳で薨去（『権記』）。故宮の話題は作中事実として何度も出ており（【臨川】一四四、一五一頁など）、『栄花』「鳥辺野」に詳しい。ここにおいて起筆の「世の中」を男女の仲の意にしぼりこむことができる。同時に、「故宮」との死別によって或る一女性が「夢よりもはかなき世の中」に苛まれていたこともわかる。また、その女性を題号に名が見える「和泉式部」と考えて矛盾はなく、さらに先取りすれば和泉式部らしき女性が作品中で「女」（以降、本稿では女と称す）とも呼ばれる。前項「四月」は、史実としては長保五年（一〇〇三）に比定でき、為尊が薨去した季節としての夏が巡ってきたことになる。「四月」が、「木の下の暗がり」「築地の上の草（以下、〈青草〉）」、後文「橘の花」「時鳥」によって女の心中で故宮不在が強く反芻されるのに似つかわしい季節を再認識させる。なお、〈青草〉に関する諸注整理をしておくと、三条西本の初期の注釈【新註】が「時節が来れば草木は再び茂るのに、亡き宮は再びかへられぬことが思はれて、ながめられたのである」との注記が、「初夏の草木の茂りはよみがえるのに亡き人はかえらないという痛切な感懐。人事と自然を対照させ、往時を哀惜する発想型」（【新編】）などに活かされ、近時は山本淳子『古典モノ語り』（笠間書院・二〇二三）に受け継がれる有力な解し方の一つである。いま一つ、〈青草〉に対する先駆な注釈に【考注】があり、それには「独り物思ひに沈んゐるものにとつて青草は晩春の悩ましさをそそるのであろうか、式部には青く茂つた草に特に感慨を覚えることがあつたらしく、例へば正集第四「草のいと青やかなるを見て遠くいにしへ人を思ふ」と詞書した歌があり、また続集上にも「草のいと青う生ひたるを見て」との詞書がある歌がある」との指摘がある。【全講】もまた『和泉式部集』正集一三、二三、続集二〇二の三首を〈青草〉の参考として新たに用例を追加した。他方、【学術】は〈青草〉の背後に漢詩文を措定、『文選』の「青青河畔草　鬱鬱園中柳　……　蕩子行不帰　空牀難独守」（巻二十九・雑詩・古詩十九首）を重視し、【角川】も『文選』の詩句を引き「青々とした草は、漢詩文では夫と離ればなれになった妻の悲しみを彩る景物」と説く。応永本の注釈書である【由良】に鑑賞が載り、近時、刊行された【新訳】は『源氏』の「右将軍が塚に草初めて青し」（「柏木」④・三四〇頁。原詩は「天ハ善人ニ与スト、我ハ信ゼズ。右将軍ガ墓ニ草初メテ秋ナリ」（『河海抄』所引「本朝秀句」（逸書）、紀在昌、承平六年（九三九））を本作品の〈青草〉に重ね合わせ、「青い草を見た瞬間に、土を盛って作った墓の上に生える草を連想した」との新見を提出する。本文に即せば、自然の移ろいというなかで毎年々々視界に入ってくる初夏の緑なればこそ、「人」は今さらそんなものにはわざわざ目など留めようとはしない、けれども女には、夏という季節の到来を告げるそれが、かけがえのない存在を失った前年の夏を強烈に想起させるものと

して目に映る。ゆえに「あはれにながむる」という表現を招来する、という論理が敷設されていることになる。また、【試作】では〈青草〉をそんなふうに眺めてしまう女の精神状態につき、「何もやる気が起こらず、嘆き悲しむ日々に明け暮れた主人公の無気力さを象徴させているものと思われる」と指摘した。本作品の自然描写の特質については、渡辺実『平安朝文学史』（ちくま学芸文庫・二〇〇〇）を参照のこと。

13・候ひし小舎人童（ことねりわらは）　「候ひし」の「し」は過去の助動詞「き」の連体形。お仕えしていた、の意。「小舎人童」は「ことねりわらは」と清音で訓む考えに従う。「童」については、【試作】にて「「少年」と解する注釈が多いが、失考と思われる」とし、「男性の童とは、年齢に関係なく（中略）【講談】が説くように、「身分」の概念である」とした通りである。『伴大納言絵詞』など参照。ちなみに、【試作】以後に刊行された【新訳】は「雑用を仰せつかる少年」や「少年の「文使い」ならではの初々しさ」と旧来のイメージで童を解するが、従えない。

14・なりけり。　「なりけり」の「けり」は、いわゆる気づきの「けり」。「誰にか」を受けて、来訪者の正体が判明したことへの気づき。姿を見せた者が、他でもない旧知の小舎人童であったのだったことをいう。

（渡辺開紀）

（2）あはれにものを思ふほどに

〔本文〕

[1]あはれにものを思ふほどに来たれば、「[2]などかいと久しう見えざりつる。[3]遠ざかる昔名残※[4]にはと思ふを」など言はすれば、「[5]そのことと候はでは、馴れ馴れしきやうにやとつつましう候ふうちに、[6]日ごろ山寺にまかり歩（あり）きはべるになむ。[7]いと頼りなくつれづれに侍りしかば、[8]御代は*[9]りに見まゐらせむとて、[10]帥宮（そちのみや）になむ参りてはべりし」と語れば、「[11]いとよきことにこそあなれ。[12]その宮はいとけ近うおはしますなるは。[13]昔の*[14]やうにはえしもあらじ」など言へば、「[15]しかおはしませど、いとけ近うおはしまして、[16]『参るや』と問はせたまふ。[17]『参りはべり』と申しはべりつれば、『[18]これ参らせよ。いかが見たまふ』」とて、橘の花を取り出でたれば、「[19]昔の人の」と言はれて見る。「[20]参りなむ。いかが聞こえさせむ」と言へば、[21]言葉に聞こえさせむもかたはらいたうて、[22]何かは、あだあだしくも聞こえさせたまはぬに、[23]はかなきことも、と思ひて、

[24]薫る香によそふるよりは時鳥（ほととぎす）聞かばや同じ声やしたると

[25]差し出だしたまふ。

（【臨川】二オ～三ウ／一三九～一四〇頁）

〔校訂〕＊侍りしかは―（京）「久しかは」を（書）「侍りしかは」により改める。
＊こそあなれ―（京）「そあなれ」を底本「こ」の脱落と見て改める。三条西本ほか「こそあなれ」。
〔応永本校異〕（京）むかしなこり―（書）むかしの名残　（京）久しかは―（書）侍りしかは　（京）帥の宮―（書）そつの宮
〔三条西本〕【清水】11～13頁　〔参考〕【本文篇】一～三頁・【本文集成】5～18頁
〔和歌他出〕1「薫る香に」歌―『千載集』雑上・九七一、『和泉式部集Ⅰ（正集）』二二六、『和泉式部集Ⅲ（宸翰本）』一四四、『和泉式部集Ⅳ（雑種本）』二一〇

〔現代語訳〕

しみじみと物思いにふけっているところに来たので、「（どうして）ずいぶんと（まあ）長い間姿を見せなかったの。どんどん遠ざかってしまう亡き宮の偲ぶよすがにはと思っているのに」などと（侍女に）言わせると、「これといった用がございませんでは、馴れ馴れしいかと気が引けておりますうちに、このところ山寺に出歩いておりまして。寄る辺なく寂しさが込み上げてきましたので、亡き宮に代わるご主君としてお仕えしようと思い、帥宮のお邸に参上しておりました」と語るので、「まことに結構な話ね。その宮は、たいそう親しみやすいお方との評判でいらっしゃる。奥床しい故宮とは違っているだろうね」などと言うと、「そうでいらっしゃいますが、（「け近い」と言っても）とても親しみやすくいらっしゃいまして、『いつもあちらの方のお邸へは伺うのか』とお尋ねくださいますので、『お邪魔いたします』と申し上げましたところ、『これを差し上げなさい。どうご覧くださいますか』（とのご伝言です）」といって、橘の花を取り出したので、「昔の人の」と自然と言ってしまい、見入ってしまう。「帰参いたします。どう申し上げましょうか」と言うから、言葉で申し上げるのも気が進まなくて「ええい、浮いた噂もあおりではないのだから、ちょっとした歌でも」と思って、

橘の花の香をよすがに故宮を偲べと言われるよりは時鳥の声をお聞きしとうございます。時鳥の声が、故宮のなつかしいお声と同じであるかどうか聞かせてもらいたいです。

（手紙を）お差し出しになる。

〔注釈〕

1・あはれにものを思ふほどに来たれば、「あはれに」は「ものを思ふ」に係る。「来たれば」に係ると見て「うれしいことに」とする考えもある（遠藤『新講』）が採らない。「あはれにものを思ふ」という係り受けを積極的に否定する材料も見あたらず、底本では直前に「あはれに|ながむるほどに」という同語反復がある。三条西本「あはれと|ながるほどに」を読み慣れている読者よりも同語反復に意識が向きやすい。

2・「などかいと久しう見えざりつる。どうしてずいぶんと長い間、姿を見せなかったのかという童への問いかけ。無沙汰の理由を単に知りたいからではなく、もっと早く頻繁に来ていいはずなのに、どうして来なかったのか、という気持ちを滲ませ「などか」と問うたもの。

3・遠ざかる「遠ざかる」は、疎遠になることを意味する語。「あしべより雲ゐをさして行く雁のいや遠ざかる我身かなしも」（古今集八一八・恋五・よみ人しらず）のように、自分と大切な人やものとの距離が広がってしまうことを嘆く場合に使われる。ここでは故宮との縁が、時間的にも心理的にも遠ざかってしまっていた悲しみを込めている。

4・※昔名残にはと思ふを」など言はすれば、底本の「むかしなこり」は他に例がない。三条西本などは「昔の名残」とある。だが、「の」の誤脱とは言い切れない。他作品には「昔の人」と「昔人」、「昔の縁」と「昔縁」（『宇津保』）があるし、「いにしへの人」と「いにしへ人」は違う意味だとも言われる（吉岡曠『源氏物語の本文批判』（笠間叢書・二〇〇六））。試みに底本のまま解釈すると、「昔名残」は「故宮を偲ぶよすが」の意で、「の」がないことで童の自立性を強調していると考えられる。「昔」は故人の意。

5・「そのことと候はでは、馴れ馴れしきやうにやとつつましう候ふうちに、「そのことと候はでは」は、これといった用件がございません、ぐらいの意。「候ふ」は「あり」の丁寧語で、「侍り」よりも丁寧の度合いが高いとされる。「うちに」には、「～のうちに」と「就中」の二通りの解し方がある。前者に従う。「うちに」の下に句点でポーズをおくと（【詳解】【昭完】【全講】など）、無沙汰になった言い訳をこしらえながら口ごもる童の姿が髣髴とする。なお、童は故宮の薨去以来、長く顔を見せなかったとは言うものの、後に「ことねりわらはきたりひすましわらはれいにもかたらへは」（【臨川】一五九頁）とあるので、女の目の届かないところで来訪を繰り返していた可能性がある。

6・日ごろ「日ごろ」は、直近の二三日を指す場合もあれば、かなり長い時間を意味する事例もある。本作品の「日ごろ」の用例を眺める限り、さほど長い期間を表すことがなく、史実に照らせば為尊の月命日である十六日との連動で直近の二三日である可能性があると見て、試みに前者で解した。ただし、森田『第二』は、後者を支持し、童がかなり長い期間山寺参詣を続けていた場合、故宮という拠り所を失った童

の「つれづれ」に迫真の重みが付与される。その無聊な日常に耐え切れず、帥宮の出仕にいたったとする動機づけという理解もできる。

7・山寺にまかり歩きはべるになむ。「山寺」は文字通り山中の寺院などを言うが、【新註】以来「故宮の菩提寺」と見る説が有力である。本稿も従う。史実としての為尊の菩提寺は雲居寺（【学術】）。『権記』長保四年六月十八日条に「弾正宮御葬送、一作御雲居寺（山城）」とある。雲居寺は承和四年（八三七）に菅野真道が建立した天台宗の寺で東山にあったが、応仁の乱で廃絶（『国史大辞典』）。童の参詣事情については諸説ある。森田『第二』は、童が帥宮に随伴して山寺に詣でていたと説く。一方、【学術】は「この時代の召使の一般的な心理としては、そこまで熱心に旧主の菩提を自分一人で発心して弔って歩くとは思えない」として、公式に行われた月命日の法要に参加した可能性を指摘している。ただし、童程度の者が親王クラスの公式な法要に参加できたかは不明。故宮の月命日の法要を裏付ける史料は残っていない。

8・いと頼りなくつれづれに侍りしかば、山寺を巡りあるいてもなお癒えることのない思いの中身を、童みずからが「つれづれに」と吐露している。故宮という拠り所を失った童の「つれづれ」なる思いと、その思いが帥宮邸への出仕に駆り立てた動機付けになっている語り口に注意。女の苦しい内面を見せつけられてきた読者は、童も内面的な動機から故宮の菩提を弔う参詣を続けていたのかと得心しながら読み進めていくべき文脈になる。

9・御代はりに　故宮に代わるご主君として、の意。なお、歴史的事実を参照せずに作品だけを眺めた場合、本作品では故宮と帥宮の血縁関係は思いのほか明瞭でないという。寛元本「御ゆかりにも」とあり、この時点で故宮と帥宮の血縁関係が明かされる形になっている。（秋澤亙「「ゆかり」の文学としての『和泉式部日記』」（「活水日文」35、一九九七・12）。

10・見まゐらせむとて、　お世話させていただこう、の意。童の再出仕の経緯につき、【学術】は「主人を失った侍臣・女房たちは、死者への追憶の心もこめて、死者のゆかりのある人に仕えることが多く、また死者の近親も、ゆきとどいた人は、主人を失い、いわば行き場に迷う人々に手をさしのべる思いやりを見せた」と推測している。故宮の死によって失われた生活の支えを取り戻すために再出仕を志したのかもしれないが、再出仕したことで童が生活環境や精神状態にどのような満足感を得たのかは、作品には具体的に書かれていない。

11・帥宮（そちのみや）になむ参りてはべりし」と語れば、「帥宮」は大宰府の長官のことであり、平安時代は親王を任ずるのが慣例。長保五年（一〇〇三）時点の「帥宮」は冷泉天皇の第四皇子敦道親王。その他、帥宮の経歴は【全講】、森田『論攷』などを参照。

12・「いとよきことにこそあなれ。　女の発話。底本を含む応永本諸本は「いとよきことにそあなれ」となっており、いずれも係り結びに難が

ある。三条西本、寛元本「いとよきことにこそあなれ」によって校訂した。底本書写以前に「こ」の誤脱か、「こそ」の連綿体として筆勢が「そ」の一字に見誤られたか。「あなれ」は「あんなれ」の撥音便無表記。

13・その宮はいとけ近うおはしますなるは。 文脈の押さえ方に諸説ある（【全講】、秋澤亙「「しかおはしませど、いとけぢかくおはしまして」考」（「活水日文」28、一九九四・3）。「その宮」は帥宮（以下、この人物を宮と称す）のこと。「け近う」は「け近し」のウ音便。「け近し」は空間的・物理的な近さを表す場合もあるが、ここは精神的・性格的な親しみやすさを言う。「おはしますなるは」の「おはします」は「あり」の尊敬語で、「なる」は伝聞。宮が気さくな性格で親しみやすい人物であることの世評を指す。詠嘆を汲んで「は」の下に句点を打つ。

14・昔のやうにはえしもあらじ」など言へば、 宮の人柄に対照させる形で、故宮の人柄を話題にしている部分。

15・「しかおはしませど、いとけ近うおはしまして、 難渋な一節（遠藤『新講』）。出仕をしてみると、本当に噂どおりの宮の気さくさに気付かされた、と試解する。「いと」は、実に、それはもう、の気分。野村精一「泉注余滴」（「研究と資料」3、一九八〇・10）は、「けちかし」と清音で読み、【集成】傍注に「そばまでおいでになって」とする。現在、これを採る注釈はないが、女の「け近う」と童の「け近し」の語義がずらされている可能性も考慮すべきか。

16・『参るや』と問はせたまふ。 「女の邸に伺うのか」と宮がお尋ねあそばす、の意。底本では、「参るや」とだけしかないため、童が来訪しようとしていた折をたまたま見つけた宮が「これから伺うのか」と言ったようにも読めるが、前後の文脈とややうち合わない。三条西本や寛元本「つねに参るや」と同様、「いつも伺うのか」の意に解する。一案として、前項の「け近し」を、【集成】のごとく、近くまでおいでになっての意に解するなら、帥宮が童の耳元で「女のもとに行ってくれるか」とに囁いた状況が思い描ける。

17・『参りはべり』と申しはべりつれば、『これ参らせよ。いかが見たまふ』」とて、橘の花を取り出でたれば、 「『参りはべり』」は宮への童の返答。「これ参らせよ」の箇所、三条西本「『これもて参りて、いかゞ見給ふとて奉らせよ』とのたまはせつる」とて、橘の花を取り出でたれば、」とあり、宮の童に命じた内容が明瞭である。三条西本から推して、近接した「とて」の目移りによる誤脱を疑う説もある（【昭完】【詳解】など）が、底本のままでも意は通じる。「これ参らせよ」は、女に差し上げてきなさい、という指示。「これ」は「橘の花」を指す。「橘」は柑橘系の樹果の総称で、白い「花」を咲かす。古来、夏を代表する樹木。時節に合わせ贈答の品を贈りあうことは平安朝の日常的な

風習であり、古歌のメッセージを託した植物の一枝を贈ることもよくあった。宮が「橘の花」を選択したのは初夏であるためだが、季節感以外の意味合いも広く論じられている。主な解し方は、次項「昔の人の」に掲げた古今集歌のもつ懐旧の念にことよせ、「故宮を思い出しているでしょうか、故宮を偲ぶ存在があなた以外にもいますよ」とのメッセージで女に接触を図ってきた、とみるもの。「いかが見たまふ」と付言している点を重視し、女の出方を伺い、和歌の詠作を求めた問いに重きをおく見解もある（森田『論攷』【角川】）。

18・「昔の人の」と言はれて見る。 女のつぶやき。「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする（古今集・一三九・夏・よみ人しらず）の一句を口にした。古今集では詞書がないので「昔の人」は男性か女性か、別れた昔の恋人か、「故人」なのか、判然としないものの、ここでは「昔の人＝故人＝故宮」にしぼって解せる。「言はれて」の「れ」は自発。「見る」は三条西家本や寛元本にない語で、凝視する、の意。女が故宮を偲ぶ存在が自分以外にもいた事実に気づかされたと同時に、故人が生き返る術がないことを痛感したふるまいと解する。なお、「五月待つ」の歌は『伊勢物語』第六十段にも登場する。『伊勢物語』における詠作状況や和歌解釈などを踏まえて、当該場面の贈答の意味合いを読み解く試みもある。（松島毅「『和泉式部日記』冒頭部分の一考察」（日記文学会第八三回大会・口頭発表、二〇二三・9））。

19・「参りなむ。いかが聞こえさせむ」と言へば、 童の発話。宮のもとに帰参することを女につげるもの。

20・言葉に聞こえさせむもかたはらいたうて、 女が「橘の花」の返答に葛藤する心中を描く部分。ここの「言葉」は、歌に対する言い方で普通の言葉、の意。「かたはらいたし」は、はたからみていて苦々しい、という心理を原義とし、転じて、はたから見られていて気恥ずかしい、といった語感も生じた。ここはそれ。「橘の花」による宮の求愛風な接近に対して歌で答えると、関係承諾の返事と受け取られかねないので躊躇されるが、かといってあじけない言葉で礼を申し上げるのは満足できない、ということ。名のある歌人ならではの葛藤が生じたものか。

21・何かは、 判断に迷ったとき、それを振り切るかのように決断する際の言葉。感動詞的に用いられる。「何々」や、「何、構うものか」などの意を表す。歌を贈ったところで何の問題があろうか、というのが、ここでの具体的な内容になる。

22・あだあだしくも聞こえさせたまはぬに、 「あだあだし」は異性関係に不誠実でだらしないこと。浮いた噂を聞かない宮の真面目さをいう。女がこう思うことから逆に、宮が弔慰だけでなく求愛の意を覗かせて接近を図ってきていることが示唆されている。なお、三条西本「またきこえ給はぬを」とある。「また」を「まだ」と解し、今後、女と浮き名を流す展開が既に意識されているという見方もある。（【新註】、小町谷照彦「和泉式部日記の方法」（「国文学」一九六九・5）、阿部俊子『和泉式部日記（鑑賞日本の古典）』（尚学図書・一九八〇））。

23・はかなきことも、と思ひて、　ちょっとしたつまらぬ歌、の意。和歌がかりそめのすさびに過ぎないという女の認識に注意。【平田】に「謙辞をよそおいながら、和泉の歌人としての自負がうかがえる」という指摘がある。その他、「はかなし」の重要性は、清水『研究』、野口元大「はかなしごと」（「むらさき」22、一九八五・7）など参照。

24・薫る香によそふるよりは時鳥（ほととぎす）聞かばや同じ声やしたると　古くは【全講】（昭和四〇）、近時は【角川】（平成一四）の見解を軸に議論が交わされてきたが解釈に定見がない和歌。当該歌の関心事の一つに「聞かばや同じ声」の解釈の仕方がある。【角川】の「『同じ声』は、昔と同じ為尊そのひとの声の意。為尊と同じ敦道の声の意とする説は採らない」とし、「いそのかみ古きみやこの郭公声ばかりこそむかしなりけれ」（古今集・一四四・夏・素性法師）を念頭に「亡き兄宮様との昔を偲ぶのなら、私は花橘の香になずらえるより、郭公によそえて偲び、その声を聞きたい」とするのは新説（藤岡忠美評）とされる。旧説（藤岡忠美評）では、故宮と同じ声か帥宮の声を聞きたい、という誘惑的なメッセージを訴えたものと説くが、もしもそのような内容だとすると、女性からの初めての返答としては大胆すぎる（清水好子『和泉式部』集英社・一九八五）ため、起筆以来の女の意識の流れにそぐわない。また、為尊と敦道の血縁から逆推的に見れば「同じ声」＝「兄弟」は自明だが、『後拾遺集』巻三・夏の「聞かばやなそのやみ山の時鳥ありし昔の同じ声かと」（皇后宮美作）の「同じ声」には兄弟の意はないので、「同じ声」＝「兄弟」の図式を和歌の典型と見做してよいのかも疑問を残す。諸々の疑問から、「橘の花」と関係が深い、春になると死出の山から舞い戻る「時鳥」の歌ことばとしての印象を解釈に持ち込む見解が近時は多い。冒頭以来の女の重苦しい内面を重視する本稿の視座に引きつけ、次のように試解する。上句「薫る香によそふるよりもほととぎす」は起筆「夢よりもはかなき世の中」と重なる重苦しい響きを奏でる表現。「夢よりもはかなき世の中」に身を置く女には、世上一般に言われるように「橘の花」が故人を思い出すきっかけにはならず、むしろ心の空白を助長するものとさえ感じられてしまう。「橘の花」で心は満たされようがない。せめて、橘の花の薫りに言寄せるよりも、夏、死出の山から戻ってくる時鳥が、去年と同じ声をしているか聞きたいのです、と解釈する。作品冒頭が強調してやまない起筆以来の女の苦悩が表現されている。

＊「薫る香に」歌、参考文献一覧

増田繁夫『冥き途』（世界思想社・一九八七）／後藤祥子「王朝和歌のこころ」『王朝和歌を学ぶ人のために』（世界思想社・一九九七）／武田早苗「『和泉式部日記』冒頭部二首についての一私見」（「相模女子大学紀要（人文・社会）」一九九八・3）→『平安中期和歌文学攷』

（武蔵野書院・二〇一九）／金井利浩「もう一つの和泉式部日記」（「中央大学国文」42、一九九九・3）／山本淳子「『和泉式部日記』冒頭歌」（「いずみ通信」36、二〇〇八・4）／藤岡忠美「『和泉式部日記』冒頭歌の解釈」（「いずみ通信」37、二〇〇八・9）／圷美奈子『王朝文学論』（新典社・二〇〇九）／武田早苗「〈シンポジウム〉『和泉式部日記』冒頭部から「待たましも」歌までを読む」（「日記文学研究誌」13、二〇一一・7）→『平安中期和歌文学攷』（武蔵野書院・二〇一九）／近藤みゆき「〈シンポジウム〉『和泉式部日記』の「はじまり」をどう読むか」（「日記文学研究誌」14、二〇一二・10）／小谷野純一「《昔の香》よりは《今の声》が」（「日記文学研究誌」15、二〇一三・10）／山下太郎「三条西家本『和泉式部日記』の引用辞「など」」（「日記文学研究」15、二〇一三・10）→『王朝日記物語の展開』（武蔵野書院・二〇二一）／金井利浩「もう一つの和泉式部日記・再攷」（「中央大学附属中学校・高等学校　教育・研究」29、二〇一六・3）

25・差し出だしたまふ。 底本の「さしいたし給」は、「差し出したまふ（補助動詞）」、「差し出し、賜ふ（本動詞）」の二様の本文整定が考えられる。いずれにしても女に尊敬語がつく地の文になり、やや不審。後世の人々の敬意の混入を疑う説もある（佐藤和喜『平安和歌文学表現論』（有精堂・一九九三）など）。ただし、底本は冒頭付近に限って女の一部の動作に敬語がつく。「御文」をとりつぐ童の視点を介した地の文であるがゆえに、女に対する尊敬語が発生したと説明できるか。さしあたり「さしいたし給」を改めずに解した。他動詞「差し出だす」は、「御あふきにふみをさしいれ給て」（【臨川】一五七頁）とあるのに同じ。

（渡辺開紀）

（3）端におはしますほどに

〔本文〕

[1]端におはしますほどに、[2]かの童、気色ばみ歩く。[3]隠れの方に御覧じつけて、[4]「いかにぞ」と問はせたまふ。御文を差し出でたれば、
[5]同じ枝に鳴きつつをりし時鳥声は変はらぬものと知らなむ
[6]と書かせたまひて、童に賜はすとて、「かかること人に言ふな。すきがましきことのやうなり」とて入らせたまひぬ。[7]来たれば、をかしと見れど、[8]つねにはとて御文聞こえたまはず。
[9]またの日、

うち出ででもありにしものをなかなかに苦しきまでも嘆く今日かな[10]

とのたまはせたり。もとも心深からぬ人の、慣らはぬつれづれのわりなく思ほゆるに、はかなき[13]ことなれど、目とどまることなれば、御返し[11]聞こゆ。[12]

今日の間の心にかへて思ひやれながめつつのみ過ぐす月日を[14]

かく、しばしばのたまはするに、御返りも時々聞こゆ。[15]

また、つれづれ慰む心地してあるほどに、また、御文*あり。言葉などこまやかにて、[16]

語らはば慰む方もありやせむ言ふかひなくは思はざらなむ[17]

あはれなる御物語も聞こえばや。暮れにはいかが」とのたまはせたれば、[18]

慰むと聞けば語らまほしけれど身の憂きことよ言ふ方ぞなき[19]

『生ひたる蘆』にては、かひなくや」と聞こえつ。[20]

（【臨川】三ウ～四ウ／一四〇～一四二頁）[21]

〔校訂〕＊御文―（京）「さ文」は「御」と「さ（佐）」の誤りか。

〔応永本校異〕（京）御ふみきこえたまはす―（書）御ふみもきこえたまはす

〔三条西本〕【清水】13～15頁　〔参考〕【本文編】三～六頁・【本文集成】18～34頁

〔和歌他出〕2「同じ枝に」歌―『新千載集』巻十六雑歌上・一七三九、『和泉式部集Ⅰ（正集）』二二七　3「うち出ででも」歌―『新勅撰集』巻十一恋歌一・六四一　4「今日の間の」歌―『新勅撰集』巻十一恋歌一・六四二　5「語らはば」歌―ナシ　6「慰むと」歌―ナシ

〔現代語訳〕

（宮が）縁先にお出ましになっていらっしゃるときに、例の童が、思わせぶりにうろうろしている。（その姿を、宮は）物陰のところに見つけなさって、「どうだ」とお尋ねあそばす。お手紙を差し出したので、

（私と故宮は兄弟、いわば）同じ枝で鳴きながらともにいた時鳥ですから、声は（故宮と）変わらないということをわかってほしい。

とお書きあそばして、童にお授けになり、「こんなことを他人に話すなよ。好色めいたことのようだ」と言って中にお入りあそばした。（童が）来たので、（女は御歌を）おもしろいと思って見るが、いつもというわけにはいかないと思って、お手紙は申し上げなさらない。

次の日、

打ち明けなくてもよかったものを、かえって苦しいほど嘆いている今日であることです。

とお詠みになっていた。元来も思慮の浅い人が、慣れないひとりの寂しさがどうしようもなく思われるところに、ちょっとしたことではあるけれども、目が惹きつけられることなので、お返事申し上げる。

今日の間の（あなたが嘆いていたとかいう）心と置き換えて想像してください。（私が）ただただもの思いに沈んだまま過ごしている月日のことを。

このように、度々仰せがあるが、お返事も時々は申し上げる。

また、ひとりぼっちの寂しさが紛れる気持ちがしているところに、ふたたび、お手紙がある。文面なども懇ろに書いてあり、

語り合ったら、気の紛れようもあるのではないでしょうか。私と話をしても仕方がないとは思わないでほしいものです。

しみじみとしたお話でも申し上げたい。夕方にはどうか」と仰せになったので、

気持ちが紛れると聞くとお話したいけれども、我が身の辛いこととときたら言い表しようもありません。

自分のような『生ひたる蘆（泣いているばかりで何も言えない身）』では、（おいでになっても）無駄ではございませんか。」と申し上げた。

〔注釈〕

1・端におはしますほどに、 この「端」は簀子であろう。三条西本・寛元本は「まだ端に……」とあり、宮が童の帰参を待ちわびていた趣だが、応永本はこれを欠き、偶然性を帯びた叙述。【学術】は、この「まだ」から、宮邸と女の邸との近接を主張するが、根拠にはできまい。なお、ここから女の邸から宮邸へと場面が切り替わる。本作品は、研究史初期から、和泉式部「自作の日記文学」か「他作の物語」かが議論されてきた。本作品は基本的には和泉式部と思しき女主人公の視点に沿って叙述されるにも関わらず、時に女の知り得ない出来事が経験性をもって語られるためである。これを根拠に、今井卓爾『平安朝日記の研究』（啓文社・一九三五）が他作説を主張、その後議論百出となったが、やがて【全講】が、宮との恋愛という、女の関心の範囲で見聞できない事柄を叙述する方法だとして、「超越的視点」を提唱する。以後、

この「超越的視点」をひとつの根拠として自作説が優勢となり、物語的な「日記文学」として研究が進められてきたが、近年、岡田貴憲『和泉式部日記』を越えて』（勉誠出版・二〇一五）に批判があり、作者については不問ながら、本作品が「物語」であると主張している。

2・かの童、気色ばみ歩く。　諸本間で異同が多く、三条西本「この童かくれの方にけしきばみけるけはひを」、寛元本「この（雅章筆本。黒川本は「その」）童隠れの方に気色ばみ歩けば」。「ばむ」はそれらしい様子が現れる意の接尾語。「ありく」には、本動詞と、「あちこちで～する」「～し続ける」意の補助動詞の用法とがあり、後者で解する注釈もあるが、ここでは「歩き回る」「出歩く」意の動詞として解し、上の「気色ばみ」と複合して、見えにくい場所から宮の気を惹こうと子細ありげにうろうろしている様子の表現とみる。身分上、宮に直接声をかけられない童の苦肉の行動をユーモラスにとらえた描写ともいえる。

3・隠れの方に御覧じつけて、　「隠れの方」は、物陰になっている場所。宮は邸の「端」にいるので、庭の茂みや建造物の陰であろう。「御覧じつく」は、見つけるの意の「見つく」の尊敬語。宮と童の位置・距離関係は残念ながらつかみがたい。三条西本「御覧じつけて」、寛元本「隠れの方にて御覧じつけて」。前項の箇所と合わせ「隠れの方に」が反復使用される寛元本の構文は不整の感を免れない。

4・「いかにぞ」と問はせたまふ。御文を差し出でたれば、　三条西本・寛元本「『いかに』と問はせ給ふに、御文をさし出でたれば、御覧じて」。応永本は、「ぞ」がある分、宮の待望が強い印象。三条西本・寛元本が「御覧じて」と宮の行為を描写する。丁寧な叙述ではあるものの、やや冗長でもある。

5・同じ枝に鳴きつつをりし時鳥声は変はらぬものと知らなむ　「薫る香に」歌の返歌。「同じ枝に鳴きつつをりし時鳥」は、諸注、故宮と宮（為尊親王と敦道親王）との同母兄弟関係の表現としており、本稿も踏襲する。【新註】【角川】【笠間】は「同じ枝」について、兄弟を表す漢語「連枝」の訳語とも指摘。「声は変はらぬものと知らなむ」は、上句から続けると、「故宮と自分は兄弟だから、声も同じだとわかってほしい」が表面的な内容となるが、裏の意味をどう読みとるかで解釈が分かれる。主流的な理解は、宮の積極的な求愛を読みとるのだが、その場合、【詳解】【新註】【全集】などに見られるように、「①声が同じ→②心も同じ→③故宮と同様あなた（女）に思いを寄せる」という解釈プロセスを経る。少しずつ解釈に飛躍を与えることで求愛歌として解釈するわけである。こうした理解は、必ずしも不可能ではないが、正確ともいえない。本稿では、女の歌の「声」との対応から、「自分の声は故宮と変わらないとわかってほしい」と解した。女が「時鳥の声が、故宮のなつかしいお声と同じであるかどうか聞かせてもらいたい」と詠んだのに対し、その意図をずらして、「自分は同じ枝の時鳥だから、あな

たが求めている時鳥と声は同じだ」と応じた体である。金井利浩「もう一つの和泉式部日記・再攷」（「中央大学附属中学校・高等学校　教育・研究」29、二〇一六・3）は、「こぞの夏なきふるしてし郭公それかあらぬかこゑのかはらぬ」（古今集・一五九・夏・よみ人しらず）を踏まえ、宮が女からの「切り返しをさらに切り返して前進すべき新たな一歩を踏み出」した歌だとみる。いずれにせよ、「声は変わらないとわかってほしい」の中に読み込むべきニュアンスが問題となるが、この冒頭二首は、登場人物相互に解釈に幅のある歌であることがむしろ重要なのであろう。お互い、相手の反応を探ろうとしているのである。寛元本は初句「同じ世に」で、寛元本を底本とする【川瀬】【講談】が「よ」を「時世」と「節」との掛詞と説くが、橘の枝に「節」が掛かるのは疑問。『万葉集』一四五六「この花のひとよ」のうちに百種の言ぞこもれるおほろかにすな」に、音韻転換で「枝（え）」を「よ」と読む例はあるが、同一視できるか。兄弟関係を意味すると考える点では、注釈間に対立はない。三条西本は第五句「知らずや」。『和泉式部集Ⅰ（正集）』に底本と同じ形で、『新千載集』に三条西本の形で載る。

6・と書かせたまひて、童に賜はすとて、「かかること人に言ふな。すきがましきことのやうなり」とて入らせたまひぬ。　宮が、女とのやりとりを童に対して口止めする。三条西本「と書、せ給ひて、賜ふとて、『か、る事、ゆめ人にいふな。すきがましきやうなり』とて入らせ給ひぬ」、寛元本「と書かせたまひて、童に賜はすとて、『かかる事人に言ふな。すきがましきやうなり』とて入らせ給ひぬ」と、小異があるが、意味に大きな相違はない。副詞「ゆめ」を用いる三条西本は、宮の警戒ぶりを強調する。「すきがまし」は、「好色めいた」「浮気っぽい」の意。返歌を得たものの、好色と見られるのを恐れた宮の姿勢を表現するが、平安朝においては用例稀少な語である（伊藤『研究』）という。「かく院にも聞こしめしのたまはするに、人の御名も我ためも、すきがましういとほしきに、いとゞやむごとなく心ぐるしき筋には思ひきこえ給へど」（『源氏』葵）が典型的な例で、内省や言い訳における使用が特徴的である。前出金井論は、宮の自評「すきがましき」を、「『同じ枝に』ありしおのが生の事実を、半ば以上の強引さをもって持続させて『女』の『薫る香に』歌を切り返すという、いかにもの不貞不貞しさを底流させることになったから」と説明する。

7・来たれば、をかしと見れど、　「来たれば」の主語は、前文からの流れを考えれば、小舎人童。童が女の邸を訪れ、宮からの文を渡し、女が手紙（歌）を見て「をかし」と感じる流れが、省略気味な行文の中に込められる。「をかし」は小舎人童の来訪に対する評価と説明する注釈もあるが、待望していたとはいえ、「をかし」の語意にはそぐわない。ここでは宮からの和歌への感想とみる。

8・つねにはとて御文聞こえたまはず。　三条西本「つねはとて御返聞こえさせず」、寛元本「常にはとて聞こえず」。「御ふみきこえたまは

す」は、底本の独自異文で、他の応永本は「御文も聞こえたまはず」。異同はあるが、女が、必ずいつも返事はできないと思って返歌しなかった、という主旨は同じ。ただし、三条西本・寛元本が謙譲語単独で、宮に敬意を表すのみなのに対し、応永本は「きこえたまはず」と、尊敬の補助動詞で、女への敬意も表現される。前段にも同様の敬語使用が見られた。地の文としか考えられず、敬意の主体を語り手と考える他ないが、他の箇所の叙述にも照らせば、女に尊敬語が用いられるのは不自然。この箇所に限定すれば、小舎人童の、女に対する敬意の反映だと見ることもできなくはないが、その場合、小舎人童が女の「つねには」という意識までも知り語っていることになり、やはり不自然さが否めない。またそうした語り方を応永本の論理として認めることも難しい。何らかの誤りを想定せざるを得ない。

9・またの日、　翌日。三条西本「賜はせそめては、また」、寛元本「賜はせそめて、またの日」。応永本は「たまはせそめて」を欠くが、文意を取るのに不都合はない。

10・うち出ででもありにしものをなかなかに苦しきまでも嘆く今日かな　「うち出づ」は、打ち明けること。「うち出ででもありにしものを」で、打ち明けなくてもよかったのに、の意。思いを打ち明けなくてよかったのに、打ち明けたためにかえって苦しいほど嘆くこととなった、が歌の主旨。女が返事をしなかったので、宮が恨んで見せた。宮が恋心を打ち明けたとの前提に立つことになり、一歩踏み込んできた趣。

11・とのたまはせたり。もとも心深からぬ人の、　「もとも」は、名詞「もと」＋係助詞「も」で、「元来も」「本来も」。「心深し」は、情愛や思慮が深いこと。「心深からぬ人」で、女が思慮の浅い人物と規定されているのだが、それはなぜか。しかも文脈は、この規定が、なぜ宮に返歌したかの理由につながっている。おそらく、女がこのように評されるのは、宮の歌における「うち出ででも」との関係からであろう。前項に示したとおり、宮の歌は女に対して恋心を打ち明けたとの前提に立つ。したがってこれに返歌することは、それがいかなる内容であろうと恋の贈答を形成することになる。女は故宮追慕と悲嘆の中にいたはずである。そのような中で、こうして宮の歌に応えるにあたり、女の気質がこのように規定されることになったのだろう。「の」は、主格の格助詞で、「もとも心深からぬ人の」は、「思ほゆる」・「聞こゆ」の主語。三条西本は「もとも心ふかゝらぬ人にて」とあり、「慣らはぬつれづれのわりなく思ほゆる」への理由となる。

12・慣らはぬつれづれのわりなく思ほゆるに、　「つれづれ」は、無聊や所在無さを表すが、ここでは、女が故宮を失ってから過した日々の孤独な寂しさ。「思ほゆるに」の部分、三条西本・寛元本ともに「おぼゆるに」。

13・はかなきことなれど、目とどまることなれば、御返し聞こゆ。　「はかなきこと」は、宮からの「うち出ででも……」の歌を指す。前段の

「何かは、～はかなきことも」という女の思惟をも踏まえる。三条西本「はかなきことも目とゞまりて、御返」、寛元本は応永本に同じ。

14・今日の間の心にかへて思ひやれながめつつのみ過ぐす月日を　宮が女から返事がないのを「苦しきまでも嘆く今日かな」と表現したのにかけて、女が自分は物思いに沈むばかりで、「今日」どころか「月日」を過してきた、その辛さをわかってほしいと切り返した。「今日の間」について、【昭完】が、「王朝時代の恋する男女の特別な心境を現はす特別の陰」を持つ言葉だとし、「今別れて来たばかりの、その今の間に」の意と説くが、この日は逢瀬もなく、宮は実際返事を待ちわびていたのであるから、ここは普通に、「私の返事を待ちわび、苦しいまでに嘆いているとおっしゃった今日の間のあなたの心」に「かへ」て、と考えてよい。「かへ」は、「取り換える」「置き換える」の意。「ながめつつ」の「つつ」は、継続。三条西本は第五句「過ぐす心を」で、「心」が同語反復。

15・かく、しばしばのたまはするに、　三条西本・寛元本「かくて、しば〳〵のたまはする」。応永本の「かく」は、「しばしばのたまはする」状況がそれ以前と同様であったことを示す副詞。三条西本・寛元本の「かくて」は、「こうして」の意の接続詞。「しばしば」は、「頻りに」「頻繁に」。「のたまはす」は「言ふ」の尊敬語。宮が求愛めいた手紙を送ってきたことを指す。恋愛の初期段階にあっては、男性からの手紙の多寡は女性への愛情をはかる指標。

16・御返りも時々聞こゆ。　宮からの頻繁な手紙に、女は「時々」しか応じなかった、の意。前項「しばしば」との対応関係に注意。宮の急接近に対するためらいの表れ。軽薄な女性と受け取られないための配慮でもある。【大系】が、この「時々」を「そのつど」と解するが、当時の男女間の手紙のやりとりの実態に馴染まない。この部分、三条西本は「御返も時々聞こえさす」。寛元本は応永本に一致。

17・また、つれづれ慰む心地してあるほどに、また、御文あり。　三条西本は最初の「また」を欠く。また三条西本・寛元本は「慰む」の直前に「少し」があり、「慰む心地して過ぐす」で文が一旦切れる。応永本は「また、～ほどに、また、御文あり」と続くので、「また」が重複気味で、行文が整わない印象。「また」には種々の用法があるが、前者は話題転換の接続詞で、後者は「再び」の意の副詞。底本は「御」の表記が「さ（佐）」に判読される。ここでは誤写と認め、他本に従って改めた。

18・言葉などこまやかにて、　「言葉」は、手紙の文面。「こまやか」は、隅々まで神経を使い、万事行き届いている様をいう。宮は、後の歌も含め、この手紙において女との対面を求めている。その意味では、女の心理的ハードル（羞恥や警戒）を下げる必要があり、そうした配慮が文面に表れていたということ。三条西本は「こまやか」の前に、前項同様「少し」が入る。

19・語らはば慰む方もありやせむ言ふかひなくは思はざらなむ　宮の贈歌。私と語り合えば、あなたの悲しみも慰みようがあるのではないか、だから話しても仕方ないとは決めつけないでほしい、の意。「語らはば」は仮定条件。「なむ」は願望の終助詞で、これまでになく下手にでた詠みぶりといえる。三条西本は第二句を「慰むことも」に作る。

20・あはれなる御物語も聞こえばや。　「御物語」の内容として、故宮のことが仄めかされているか。「聞こえばや」の「聞こゆ」は「言ふ」の謙譲語で、「ばや」は願望の終助詞。宮が「語らはば」の歌に続き、さらに下手に出て女の歓心を買おうとしていたと読み取れる。「聞こえばや」の部分、三条西本は「聞こえさせに」とあって、文が切れることなく次項の言葉につながる。

21・暮れにはいかが」とのたまはせたれば、　夕刻の訪問を打診する趣旨に見えるが、通常は、そう述べておいて、相手側の了解を得て夜訪れる。清水好子「和泉式部日記の基調」（「関西大学国文学」54、一九七七・9）に同趣の指摘がある。寛元本は「暮れには」の前に「忍びて」があり、女に対する配慮とも見えるが、初めて会う段階から情事を匂わせた言い方にもなり、状況にそぐわない印象がある。

22・慰むと聞けば語らまほしけれど身の憂きことよ言ふ方ぞなき　宮の「語らはば」の歌への返歌。表面上、下句がやんわりと来訪を断る内容だが、本気の拒絶であれば返歌しないので、了解と受け取られる余地がある。第四・五句は、三条西本「身のうきことぞいふかひもなき」、寛元本「身の憂きことや言ふかひぞなき」。応永本では、第四句末に間投助詞「よ」が置かれ、贈歌の「言ふかひなし」を「言ふ方なし」として贈歌の「慰む方もありやせむ」と対応させ、「かひなし」が追而書に回る体になる。贈歌に見られた「～ば」という詠い出しが当該歌でも採用されるが、こちらは確定条件。「慰む」「語る」「言ふ方なし」も贈歌に由来するが、語句の意味は逐一ずらされ、第四句「身の憂きこと」が強調される。この「身の憂き」が、続く追而書に見られる引歌と響きあい、一層陰翳を増してくる。

23・『生ひたる蘆』にては、かひなくや」と聞こえつ。　三条西本「『生ひたる蘆』にて、かひなくや」、寛元本「生ひ（雅章本。黒川本は「おい」）たる蘆にて便（び）なくや」と、小異がある。諸注の指摘通り、「生ひたる蘆」は、『古今六帖』一六八九「何事も言はれざりけり身の憂きは生ひたる蘆のねのみなかれて」の一句。言いたいのは、上句「何事も言はれざりけり身の憂きは」である。当該歌は詞書を持たないので、「身の憂き」の原因が明確でないが、何一つ言えないほどの慟哭に、もはやどうにもならない諦念がよく表れている。その諦念が女の歌の「身の憂き」と結んで、「夢よりもはかなき世の中」に身を置いていると自覚する女の、冒頭以来の無常観へ連なってゆくと考えると、引歌として十分な効果を挙げていると言える。ちなみに、この一六八九番歌の作者を山部赤人とする注釈書が多いが、これは、青敏夫「和泉式部日

記『おひたるあし』考」（「九大国文学会会報」5、一九三三・6）の作者誤認を踏襲したもので、誤りである。「かひなし」は、効果がない、無駄である、の意。「や」は疑問。宮にとって、自分（女）に逢っても「かひなし」なのだと言いたい。

（松島毅）

（4）暮れには思ひかけぬに

〔本文〕

暮れには思ひかけぬに忍びて行かむ、と思して、昼よりさる御心地して、日ごろも御文とりつぎて奉る右近の将監、人しづめて、忍びて召して、「ものへ行かむ」とのたまはすれば、さなめり、と思ひてさぶらふ。

あやしき車にて、「かくなむ」と言はせたまへれば、女、いと便なき心地すれど、なしと聞こゆべきにもあらず、昼も御返り聞こえさせつれば、ありながらは、帰したてまつらむもなさけなし、物ばかりは聞こえさせむ、と思ひて、西の妻戸に藁蓋さし出でたり。入れたてまつるに、世の人の言へば思ゆるにやあらむ、まことになべての御さまにはあらず、なまめかし。これも心づかひせられて、物など聞こゆるほどに、月、さし出でぬ。「いと明かし。古めかしう奥まりたる身なれば、かかる所などには通ひならはぬを。いとはしたなき心地もするかな。その、おはする所に据ゑたまへ。よも、さきざき見たまふらむ人のやうにはあらじ」とのたまへば、「あやし。今宵のみこそ聞こえさすとは思ひはべれ。さきざきは、いかでかは」と、はかななきこと聞こゆるに、夜もやうやう更けぬ。

「かくて明かしつべきにや」とて、

はかもなき夢をだに見で明かしては何をか夏のよ語りにせむ

とのたまへば、かくなむ、

よとともにぬるとは袖を思ふにものどかに夢を見る宵ぞなき

まいて」と聞こゆ。

（【臨川】四ウ～六オ／一四二～一四三頁）

〔校訂〕※さふらふ―（京）「つ（徒）ふらふ」を「さ（佐）ふらふ」と仮に判読する。

※はかななきこと―（京）「はかなくきこと」を「はかなゝきこと」と仮に判読する。
＊今宵のみ―（京）「こよひののみ」を（書）「こよひのみ」に拠り改める。
〔応永本校異〕（京）つふらふ―（書）さふらふ　（京）はかなくきこと―（書）はかなきこと　（京）こよひののみ―（書）こよひのみ
〔三条西本〕【清水】15～17頁　〔参考〕【本文篇】六～八頁・【本文集成】34～52頁
〔和歌他出〕7「はかもなき」歌―ナシ　8「よとともに」歌―ナシ
〔現代語訳〕

暮れ方には思いもよらない時間帯にひそかに行こう、とお思いになって、昼間からそういうお心づもりをして、ふだんもお手紙を取り次いで宮様に差し上げている右近の将監（じょう）を、周囲の者たちを人払いしておいて、そっとお呼びになって、「あそこへ出かけよう」と仰せになるので、右近の将監は、あの女の所なのだろうな、と思ってお供する。

粗末な車でお出でになり、「こうした次第で」と右近の将監に来意を告げさせなさると、女は、ひどく困惑したけれども、おりませんと申し上げるわけにもいかず、昼間もお返事を申し上げたのだもの、家にいたままというのは、結局はお帰し申し上げることになるにしても失礼というもの、少しくらいはお話し申し上げよう、と思って、西の廂の間の妻戸のあたりに藁蓋（わらうだ）をさし出した。お入れ申し上げるにつけ、世間の人びとが噂しているのでそう感じられたのであろうか、ほんとうに並みひととおりのご様子ではなく、優美である。その事実も女には自ずと緊張を強いられることとなって、差し障りのない話題についてお話し申し上げていると、月がさし昇った。「あまりに明るすぎます。古風でこもりがちな者ゆえ、こうした所などには通い慣れておりませんので。どうにも落ち着かない気がしてなりません。その、おいでになる所にお入れください。決してこれまでにお逢いになっている方々のようにはいたしません」とおっしゃるので、「変ですわ。今夜に限ったお話を少しばかり申し上げるものと思っておりますのに。『これまでに』なんて、どうしてあり得ましょう」と、いかにもたわいのないことを申し上げるうちに、夜も次第に更けていった。

「このまま夜を明かしてしまったものだろうか」と言って、

はかない夢さえも見ることなく一夜を明かしたとなれば、いったい何をこの夏の短夜の思い出話にしようというのでしょう

とお詠みになるので、このように、

夜がめぐってくるたびにいつもいつも「ぬる（寝る）」どころか亡き宮様を思って涙で「ぬる（濡れる）」袖のことを思うにつけても、心穏やかに夢を見る宵なんて私にはありません

まして今夜などとてもとても」と申し上げる。

〔注釈〕

1・暮れには思ひかけぬに忍びて行かむ、と思して、「暮れには思ひかけぬに忍びて行かむ」は、宮の心中思惟。これを、「暮れには、『思ひかけぬに忍びて行かむ』と思して」と解し得る余地もあるにはあろうが、次の文節「昼よりさる御心地して」との間で宮の動静に係る時系列に齟齬をきたすゆえに、その解は取らない。「夜」よりも前の「暮れ」に訪れかかるという意味合いにおいて、女は「思ひかけぬ」と感じるであろうという算段を宮はしているのである、と読んでおく。応永本に固有の「暮れには」は、往訪の一般的な時間帯である「夜」よりも早いそれを明確に指し示したことになる。

2・昼よりさる御心地して、宮は、例に従えば「連絡」をしておくべき時間である「昼」に、「暮れには……行かむ」との心づもりを抱いていたのである。「心地」は、ここでは、考え・心算、の意。

3・日ごろも御文とりつぎて奉る「日ごろ」は、いつも、ふだん、の意。「とりつぐ」は、手紙の伝達をすること。「奉る」は「与ふ」の謙譲語で、宮に敬意を払った物言い。小舎人童一人が手紙の仲介役ではなかったことがここで明らかになったかたちである。

4・右近の将監、「ぞう」（「じょう」とも）は、『大宝令』による四等官の三番目。官庁により当てる漢字が異なる。これまで諸注釈の多くは、読みやすさを考慮してか、「尉」を当ててきたが、それは兵衛府・衛門府・検非違使庁の場合である。近衛府では「将監」を当てるのが正しい。したがって、本稿では、以降、「右近の将監」とし、この人物を「うこんのじょう」と呼んでいく。宮の側近の一人。後に、小舎人童と同じく故宮にも仕官していた経歴をもつことが知られる。右近衛府の三等官で相当位は従六位上。このあたり諸本間に異同が多く、この人物の登場の仕方も伝本によって微妙に異なる。

5・人しづめて、忍びて召して、応永本の独自異文。「しづめ」は、下二段活用の他動詞「しづ（鎮・静）む」の連用形。「今宵だに人しづめて、いと疾く逢はむ」（『伊勢』六九段）、「夜深きほどに、人をしづめて出で入りなどしたまへば」（『源氏』夕顔）といった用例などからは、お忍びで相手の許に通う際の状況設定を示す慣用的な表現であったようにも目され、ここもそれと同様の意味合いで「みなを寝しずまら

せて」などと解されてきた（【由良】）が、この前後の宮の情動や行動に鑑みるに、そう解し得るほどの時間には至っていない、つまり「夜」や「宵」と結び合わないことが歴然であり、文脈上の整合性を担保できない。近時、【新訳】が「宮様は、外の者たちに指図をして、自分の周りにも誰もいないような状況をお作りになったうえで」との解釈を施したのも、故無しとしないのである。いま、そもそも「しづか（静）」と同根ともされる「しづむ」が、「活動しつつあるものを」一定の力や言葉などによって「平静な状態にさせる」（『角川古語大辞典』）のを原義とすることに鑑み、また、「憚りなき衣の音なひ、人のけはひしづめてなんよかるべき」（『源氏』鈴虫）、「そなたに人々は入れたまふ。しづめて、宮にも、ものの心知りたまふべき下形を聞こえ知らせたまふ」（『源氏』同右）といった用例にも徴して、人事に係る何らか気配やざわめき、あるいは反応や動きといったものを制する、と把捉してよいのではあるまいか。いま、そうした意味合いで「人払いしておいて」との現代語を充てておく所以である。

6・「ものへ行かむ」とのたまはすれば、　宮の右近の将監にむかっての発話。「もの」は、とかく、「特にそれと限定せずに対象を漠然と指す語」などと説明されるために、何事もあからさまに名指しするのを避ける当時の流儀に由来する（【考注】【学術】）とか、逆に、ここは本来、具体的に某所・某女と述べられていたのだろう（【中嶋】）などと、或る意味で徒な議論にも陥りやすいが、肝心なのは、ここでの「もの」の使い手である宮は、行こうとする目的の場所を明確に意識したうえでそれを「もの」と呼称している、ということである。であればこそ、次に今度は、その表現の受け手がその内実を察し得るかどうかの機微の問題が浮上することになるのである。「む」は、宮から右近の将監に対しての、随伴の〈要請〉と見られなくもないが、宮の〈意志〉と解する。

7・さなめり、と思ひてさぶらふ。※　「さなめり」は、宮の発語である「もの」の内実を、右近の将監がまさに察したことを示す一節。「なめり」は「なんめり」の撥音便無表記。「さぶらふ」は、お供する、随伴する、の意。

8・あやしき車にて、「かくなむ」と言はせたまへれば、　「あやしき車」は、宮のような身分ある存在が乗るには相応しからぬ車をいう。網代車であろう。なお、「車」に、三条西本のごとき尊称の「御」の無いことから、「あやしき車にてかくなむ」全体を取次の者に言わせたと見ることも論理的には可能だが、「あやしき車」であることをわざわざ女側に口外するのは、不自然の感を否めない。ここは、むしろ、もとより宮の「御車」ではない車を、いかにも宮が乗るのには相応しくないといった体に設えてお越しになった、そうした事情を反映したものと考えておきたい。「かくなむ」は、往訪の際の挨拶の慣用語「かくて（かうて）候ふ」に準じる表現とも見られるが、実際に右近の将監の口か

ら発せられた物言いそのままではあるまい。「かくかくしかじかの思いからこのように」と、その来意を右近の将監に告げさせたものと見ておく。

9・女、 ここを初出として、以下、女主人公は一貫してこの「女」という第三人称で描かれ、当の「女」の経験・見聞外の出来事が描出されていくことから、それをもって他作説の根拠とされ、また〈物語〉として扱うべき一証左ともされてきた。なるほど、「物語で主人公が『男・女』と呼ばれるのは、愛の主題が高揚した時など特定の局面に限られる」（【集成】）とか、「物語においては、『男』『女』の記載は、場面が高潮し、感情移入が求められる場面に多い」（【ほる】）といった注が施されてきたことも一定の得心をもって思い合わされるところだが、この作品にあっては「宮」はどこまでも「宮」であり、ついに「男」と呼称されることはなく、身分に落差のある関係にこそ意を用いるべきが、この作品の読解においては肝要であろう。言を換えれば、この作品における「宮」は、「男」を内包しているのだとする理解が求められるのである。なお、「女」という人物表示について、「歌物語」や「物語化した私家集に見えるもの」で、『蜻蛉日記』や『更級日記』が歌集を核として創られたことと照応するところがあり、自他作の問題にはかかわらないと思われる」とした野村精一の見解（『日本古典文学大辞典』岩波書店・一九八四、「和泉式部」の項。）もある。ちなみに、この作品における「女」の現出回数は、三条西本では13、寛元本・応永本では14である。七月の条は「くれぐれと秋の日ごろのふるままに」歌の詠者たる「女」を、三条西本は記していない。

10・いと便なき心地すれど、 底本「びなき」は「びんなき」の撥音便無表記。「便なし」は、もと、物理的に都合が悪い、の意。やがて、その悪い状態に身を置くことで生じる精神的な不調をいうようになり、具合が悪い、困る、の意。先に、宮が「思ひかけぬに忍びて行かむ」と「昼より」抱いていた「心地」＝心づもりが実行されるに及んで、女はまさに「思ひかけぬ」状況におかれることとなったのであり、「便なし」の語が、その事態とそれに伴って生まれた女の感情の両方をよく表している。着々と推し進められてここに至った宮の「心地」に、まさか宮様の来訪がこの日とは思いも寄らずに、身辺の準備も、何らの心づもりもしていなかった女の今の「心地」とが、まさに対置された恰好であることに留意したい。

11・なしと聞こゆべきにもあらず、 いないと申し上げられることでもない、が直訳。女は、さすがに居留守を使うわけにはいかないのである。以下、「物ばかりは聞こえさせむ」まで、宮への対応に逡巡する女の、とつおいつする内面を連綴する。〔本文〕の当該箇所をすべて読点で処理した所以である。そこに披瀝される思惟は、女が「便なき心地」に陥るほかなかったその事由の具体を示すとともに、女の意識下に横

たわる身分格差・身分秩序がさながら彼女の判断や行動を制限していたことを物語ってもいる。ただし、またそれは一方で、宮をついに導き入れるほかなかった女の営みの正当ないし已むを得なさを担保する語りようであることにも、併せて目を向けておきたい。

12・昼も御返り聞こえさせつれば、ありながらは、帰したてまつらむもなさけなし、　女は、昼間にはお返事を差し上げたわけだし、ただ部屋の内にこもったままというのは、お帰し申し上げるにしても心無い振る舞いである、との現状認識とそれに基づく省察とを重ねるのである。なお、底本の「御返」は「お返事」の謂いとみて「御返り」と校訂したが、その「昼」のお返事とは、言うまでもなく、先の「なぐさむと……かひなくや」の文（ふみ）のことである。ところで、「ありながらは」は、三条西本では「ありながら」である。「家にいながら宮をお帰し申し上げるのは」という直線的な思惟ではなく、「家にいたままというのは」、「どのみちお帰し申し上げることになるにしても」と、思惟を停止しては進めてゆくそのありようと、応永本固有の「は」という助詞ひとつのもたらす微妙なニュアンスを味わいたい。また、「なさけなし」についても、三条西本は「なさけなかるべし」と作り、径庭がある。それは表現の差異というにとどまらず、結ばれる人物像に影響することにもなろう。以下、こうした異同には留意していきたい。

13・物ばかりは聞こえさせむ、と思ひて、西の妻戸に藁蓋（わらうだ）さし出でたり。　少しお話し申し上げるくらいは構わないだろう、という判断のもと、女の用意した「藁蓋」が、西の妻戸の内、すなわち廂の間の妻戸あたりに差し出されたのである。ここのような「物」は、辞書レベルでは「心でとらえられるもの。話したり思ったりすることの内容。ある事、何か。」といった説明が施されるのが一般だが、より文脈に即していえば、差し障りのない話題、形式的な会話、といったニュアンスであろう。問題は「妻戸」だが、早くに【全講】が「西の妻戸のうち、つまり西の廂の間をさす」と言明し、近時では川村裕子『はじめての王朝文化辞典』（角川ソフィア文庫・二〇二二）が、「もしも、簀子に座っていたら、廂を越えて母屋に行かなくてはいけませんよね。だから、彼は、最初、廂にいたことがわかります」と詳述してみせたとおりであろう。尤も、「かかる所などには通ひならはぬ」との本文に、より契合する空間は、「簀子」こそであろう、との判断もあり得ようが、このあとの「入れたてまつるに」との表現や、「まことになべての御さまにはあらず、なまめかし」と女が実感し得るに相応しい宮との距離といった観点に重きを置けば、やはり、「廂」説に傾かざるを得まい。「わらうだ」は、三条西本の「わらざ」との相違を考慮して、あえて「藁蓋」と表記した。『延喜式』によれば素材ごとの大きさや使用する人間の身分に応じた厚さあるいは縁の種類など、一定の規矩のあったらしいことを知り得るが、たとえば『源氏物語』に見える3例はいずれも最良の敷物とは言えぬように見え、ここでも、女にとっては決して正格ない

し本格的な訪問を宮に許容したわけではないことの表徴のように思しい。

14・入れたてまつるに、「入れたてまつる」は、事実上、女が宮に廂の間までの踏み入れを許したことをいう。ついに宮が女のいる建物空間に進入することになったという事実もさりながら、廂の間へと入る宮のその挙措こそが、女の視線と語り手のそれとを同時に発動せしめてゆくことになるという実態をも包摂している点において、重要な結節点となる文節である。

15・世の人の言へば思ゆるにやあらむ、まことになべての御さまにはあらず、なまめかし。　語り手が顔を覗かせた一文である。世評に支えられながら、ないしは世評に拠る体をまといながら、より確かなかたちで、語り手の視線をとおして捉えられた宮のもつ美質が、ここに客観的に示されたのである。「なまめかし」は、後条にも「前栽のをかしきなかをありかせ給て人は草葉の露なれやなとのたまはすいとなまめかし」（【臨川】一五七頁）とあって、宮の美質を語るうえでの鍵語と言ってよい。いったい辞書レベルでは、未熟で新鮮なの意の「生」に発する「生めく」「生めかし」が語源であろうとされ、あらわに表されず不十分に見えながらも、実は成熟している状態が見てとれるようなさまをいう、とか、未熟な清新美から派生して奥ゆかしく上品な優美さの意をも表す、といった語義説明が付与されるのが常である。ただし、実用例では、四十の賀を迎えた源氏を「御賀などいふことは、ひが数へにやとおぼゆるさまの、なまめかしく…」（『源氏』若菜上）と語ったり、源氏のもとに降嫁した十三歳ほどの女三の宮が「うつくしき子どもの心地して、なまめかしうをかしげなり」（同）と語られたりしており、「元来は、老熟したものがなお若々しく見せる美しさをいう」と注する【集成】の至当を思わせる場合がむしろ目につくようである。その意味では、先に触れた辞書レベルの語義説明は、まさに本作において宮について用いられた「なまめかし」に対してこそ、より当て嵌まると言えよう。ちなみに、この作品では、宮の容姿は賞賛されるものの、女のそれが焦点化される場面は訪れない（山上義実「『和泉式部日記』における容姿美の描写をめぐって」（「金城学院大学論集」一九九〇・3）、金井利浩「服飾表現と和歌、その〈欠落〉の彼方へ」『日記文学研究 第二集』（新典社・一九九七）など）。自他作の議論といかに切り結ぶのか、なお追究すべき余地はあろう。

16・これも心づかひせられて、物など聞こゆるほどに、月、さし出でぬ。「これも心づかひせられて」は、その優美さも女には自ずと緊張を余儀なくされることになって、の意。「られ」は自発。「物など聞こゆるほどに」は、先の、「物ばかりは聞こえさせむ」とうち合う表現である。「これも」についてはこれまで、①（宮が高貴であることに加え、）並々ならず優美であるそのことも、の意（【最新】【由良】など）、②（宮も心づかひせられ、）女も、の意（【考注】【全講】など）、といった二つの理解が主に行なわれてきたが、いずれも決め手を欠いてきたよ

うに思しい。まず②については、もしもそのような文脈であるならば「直前に宮の心づかいの様子などがほしいところである」とした【由良】の指摘もさりながら、そもそも、数行前に起ち上げられた「女」を主語とする文脈はなお一貫して底流しており、ここで「女」を指す人称代名詞「これ」が改めて据え直されるのは、むしろ不自然ではあるまいか。「女」は、宮を「入れたてまつるに」際して、すなわち、宮の廂の間への踏み入れを許容した時点で既に一定の身構えと「心づかひ」とを余儀なくされていたのではなかったか。いまそこに、世間でも定評の、宮の絶対的な優美さなるものが、女のさらなる「心づかひ」を強いる要素として加わったのである。その意味においては、①は①で、「（宮を「入れたてまつる」こと自体に加え）並々ならず優美であることも」と修正されるべきであろう。世評につづく語り手の評言→語り手の評言につづく女の情動、といった行文の結構が、そうした読み取りを支え得るであろうことを、ここに確認しておきたい。さて、「月、さし出でぬ」は、単に月光が射し始めたという事実のみを言い表しているのではない。それは、時の経過を指し示す表現であり、宮の身と心とが焦点化されるその端緒を直叙する表現でもあった。一見さりげないが、この後の展開にとっては重要な起点であることを押さえておきたい。

17・「いと明かし。　夙に、①月の様態を指し示す地の文（【竹野】）か、②簾中への進入を果たすために宮の用いた口実の始発部分（【昭完】）かが争われてきた。もとより会話であることを断る記号としての鉤括弧など持ち合わせなかった時代の仮名文の構文原理からすれば、①②の両義を同時存立的に発動し得るところにこの「いと明かし」という一文の意義があり、その文体の妙味を味わうべきが本来なのであろう、と少しく強調したうえで、本稿では、「かかる所に通ひならはぬ」宮の実感としての発話であった、と読んでおく。おそらく妻戸は開け放たれていて、廂へと射し込んでくる月明は、よほど強かったのであろう。それはいかにも見え透いた口実のようでありながら、それこそが内に迎え入れられるべき正当な事由であると言わんばかりに、何としても女への接近を図りたい宮がおのが実意の実現に向けて発した一言であった。いわば口火を切るかたちで発せられたその口説あってこそ、つづく「古めかしう奥まりたる身なれば」以下の嘆訴の論理は十全に、また滑らかに形成されるものとなるであろう。尤も、「いと明かし」を口実とするようでは宮の人柄に奥行きがなくなるとの見解があり（遠藤『新講』）、それを【中嶋】も支持するが、「宮の人柄」は作品の総体から結果するものであって、宮のあるべき「人柄」を恣意的に想定しておいて、その想定から外れるからという理由をもって或る表現や文脈の如何、あるいはその当否を決するような姿勢は、当然に慎むべきであろうし、また、そのような想定上の人柄は、言うまでもなく、当該の表現や文脈の読みを決定づける根拠にはなり得まい。

18・古めかしう奥まりたる身なれば、かかる所などには通ひならはぬを。 物の考え方も古くさく殿舎の奥に押し込められがちな身の上ゆえに、日常の居所以外のこのような場所にはそもそも通い慣れていないのだよ、と嘆いてみせるのである。「かかる所」とは、こんな端近な場所、の意。具体的には、いま月光のさしこむ西の廂の間を指す。ところで、「かかる所などには通ひならはぬを」は、三条西本では「かかるところにゐならはぬを」である。「古めかしう奥まりたる身なれば」が所詮は口実であるとしても、それを理由とする以上は、「居慣れない」よりは、そもそも「通い慣れていない」とするほうが論理的整合性は優ろうか。あるいは逆に、このあとの、女に向けての嘆訴の直截さに照らせば、「こんな場所には居慣れないのだ」とするほうが、より滑らかに接合すると言えようか。

19・いとはしたなき心地もするかな。 「はしたなし」は、中途半端でおさまりのつかない状態、ないしはその状態からくる落ち着かない感じやきまりの悪さを表すのが原義。何ともいたたまれない気持ちまでもがするのですよ、くらいの意。三条西本が「いとはしたなき心地するに」と、次の文節に掛かるのに対して、応永本は、ここで切れる。

20・その、おはする所に据ゑたまへ。 「おはする所」が、簾を隔てて女の端座する母屋の端であることからすれば、この一文が、事実上、あなたのいらっしゃるその場所に坐らせてくださいませんか、くらいの意になることは動かしようがあるまい。ただし、というよりも、それゆえにこそ、宮の用いた表現が「その、おはする所に」であって、「そなたのおはする所に」ではないことに、しかと意を留めておきたい。

21・よも、さきざき見たまふらむ人のやうにはあらじ」とのたまへば、 「さきざき見たまふらん人」は、今までおつき合いなさったであろう男性、の意。「さきざき」をめぐっては、たとえば松尾聰『古文解釈のための国文法入門』（研究社・一九七三改訂増補版）が、「『さき〳〵（以前）』が『らむ』に伴うのは不審である。伝本本文に誤りがあるのかもしれない」と訝り、「『さき〳〵』を『将来』の意とみなして、『らむ』を合理化しようとする説がいろ〳〵出ているが、納得するに足るものはまだ見あたらない」と断じたが、森田『第二』「和泉式部日記『さきざきみ給らん人』考」によって、過去をあらわす語彙であること、にもかかわらず対応する活用語の時制を過去に限定することのないことばでもあったことが闡明されて議論は一定の収束を見、【中嶋】が「従うべき見解と思われる」として念押しのピリオドを打った感が強い。果たして小田勝『実例詳解古典文法総覧』（和泉書院・二〇一五）なども、「らむ」の項で「過去事態の推量を表す例」として本箇所を引く。いま、宮は、そうした機制のことばをもって女の恋愛遍歴のなかの男たちを引き合いにして、自らの真正と誠実とを押し立てるのである。

22・「あやし。今宵(こよひ)のみこそ聞こえさすとは思ひはべれ。　「今宵のみ」は、底本では「こよひののみ」に作る。【臨川】は「今宵の」の「の」に朱のミセケチがあるのに拠ってそれを衍と見るが、本稿では、底本が「こよひのゝみ」ではなく「こよひののみ」という、或る意味で異例の書字事象を見せている点に鑑みて「の」一字を衍と判断し、「今宵のみ」との本文を立てておく。「聞こえさす」は、元来、本動詞「聞こゆ」の未然形＋使役の助動詞「さす」で、相手に直接申すのではなく、人を介して申し上げる意である。「今宵のみ」といい、「聞こえさす」といい、さらには、「こそ」―已然形（「思ひはべれ」）によって生成される逆接の文脈といい、いずれも女の心の防備の堅牢さの現れと看て取ることができよう。

23・さきざきは、いかでかは」と、　さしあたり、「さきざきはいかでかは（ある）」と読めば、「今まで」なんてあり得ませんわ、くらいの意、「さきざきはいかでかは（仰せらる）」と読めば、「今まで」なんて理屈からしておっしゃることなどできないはずですわ、くらいの意となろう。ただし、近時、【新訳】がここを、「『先々（これからは）』ですって。おかしなことを、おっしゃいますわね。私は宮様とは、先々は、もうお会いすることはないものと思っております。今宵だけの話し相手のつもりでおりますのよ」と訳してみせた。先の議論を逆手にとるようにして「さきざき」の両義を復活させ、宮が「これまでに」の意味合いで用いたのに対して、「これからは」の意で用いて切り返したものと解し、そこに「洒落た会話」の成り立ちを読み取ったのであった。改めて、「さきざき」を、将来・行く末、今後・これから、といった意に解し得るのか否か、が問われた恰好である。たとえば『角川古語大辞典』は、その用例として「さきざきに何かならはむ今のごと物思ふことのあらばこそあらめ」（続集・四二〇）を掲出する。なるほど、一見、そう解し得る余地があるようにも思しいが、これが「物なげかしげなるを見て、『前にいかなる人の心をか見ならひて』といふ人に」との詞書に導かれてあるとき、詞書のなかの「前」の語ともども、やはり、「以前に」の意に縛られていくほかなくなるであろう。今後、確例を見出し得るか否かがひとつの鍵となろう。その到来の時に出会えぬままの今は、【笠間】の示した、帥宮が「さきざき見たまふらむ人」を他称として用いたのを女は「宮の自称に取りなして」切り返したとする理解に、せめて拠っておくべきであろう。女は、そのように切り返すことによって、過去に関わった男たちを非在のものにしたのみならず、直前の「今宵のみ…」の発語とも相俟って、宮とのこれからの継続的な関係についても否定したのである。

24・はかななきこと聞こゆるに、夜もやうやう更けぬ。(※)　「はかななき」は、底本では「はかなくき」とも「はかなゝき」とも判読し得る。【臨川】は「朱のミセケチがある」として、「く」を「衍字」と注したが、いまそれには従わず、「はかななき」を「はかなし」の連体形と

見る。「はかななし」の実例は管見に入らないが、たとえば、「うしろめたし」に対する「うしろめたなし」の現存が参考になろう。「うしろめたし」の語幹「うしろめた」に、状態を表す接尾語「なし」が接続した、それが「うしろめたなし」の組成であり、結果的に「うしろめたし」の意味合いが強調されることになる。いま、これに基づけば、「はかななし」は、なんともたわいない、実にとりとめない、の意となろう。宮が他称として用いた「さきざき見たまふらむ人」を敢えて宮の自称に取りなして切り返した、そんな女のじらしを含んだ、たわいないといえばたわいない言葉のやりとりを、ここで語り手は「はかななきこと」と措定したのである。

25・「かくて明かしつべきにや」とて、 三条西本は「かくてあかすべきにや」。応永本の有する「つ」は、強意の助動詞である。宮から女への発話、宮の心中思惟、どちらにも解し得る。窮状に甘んじていられようかとの自問から、窮状打破に向けての一首の詠出へと、心内表現と見る場合でも理路は整然と通すことができようが、ここは、廂の間までは通された宮が、甘んじてそこにいる現状をあり得ないこととして「このまま夜を明かすわけにはいかない」と女に訴え迫った、歴とした発話であった、と見ておく。廂で一晩を明かすなど、宮には到底考えられなかったのである（山下太郎「歌物語としての『和泉式部日記』」『王朝日記物語の展開』（武蔵野書院・二〇二一）参照）。

26・はかもなき夢をだに見で明かしては何をか夏のよ語りにせむ 宮の贈歌。三条西本は、「夏の」を「のちの」とする。「はかもなき夢」は、仮寝をした際に見るはかない夢の意で、女に共寝を誘う婉曲表現。「よ語り」の「よ」には「世」と「夜」とが掛けられるとしばしば説かれるが、そこから直ちに「世語り」と「夜語り」と説くべきではない、というよりも、そう説くことには難がともなう。というのも、「夜語り」の語の、平安期における成熟・成立への不審の議論、あるいは「よがたり」に係る【中嶋】の、「歌語としては『世がたり・夜がたり』を掛けているケースが多いように思う。但し用例の時代は下る」との指摘も然りながら、一首の歌意の理解において、一方の「世語り」はよいとしても、もう一方の「夜語り」の文脈については論理を通すことができないからである。すなわち、前提条件となる、はかない夢をさえ見ないままに夜を明かしてしまうとしたら、との前段の状況が示された時点において時間はすでに「朝」ないし「日」へと移ろっているわけで、そのうえで、何を「『夜』にするお話」にしようというのかとの後段の詰問は、論理的に接合しようがないからである。果たしてここは、「よ」は「世」に「夜」を響かせるとしたうえで、「夏の夜」の「世語り」と、いわゆる連鎖型の掛詞としての理解をほどこすべきであろう。ただでさえ短い夏の夜にまつわる二人の間の語り種ないし思い出話、それをこの夜を皮切りに作ることを、宮はこの一首をもって女に迫ったのである。なお、三条西本の「のちのよがたり」に対する「夏の世語り」との表現のありようをより重く視るとすれば、作品の冒頭四月、自

然の移ろいという循環のなかで世間一般の人びとにとっては何らの意識にものぼらない草の緑に目を遣り、前年の夏に失ったかけがえのない存在を思い、悲歎に暮れ、追慕に明け暮れていた女の「夏」を回収し、二人にとっての新たな「夏」を生成していこうとの心意を、宮はここに表明したのである、との読み取りも可能になってこよう。ところで、この作品において「世語り」の種になることは二人にとってはいかにも忌避すべき事柄ではあろう。けれども、それはそれであって、いまここで詠まれた「世語り」は、二人の間の語り種、二人でする思い出話の謂いであり、世間の噂話とは全く次元を異にするものであること、今さら断るまでもあるまい。宮は一首を介して、もとより短い夏の夜を、ただただ明かしてよいものか、何かしらの語り種、思い出話を、二人の間に残すべく共寝しようではないか、そう女に躙(にじ)り寄ったのである。

27・とのたまへば、かくなむ、　そのように宮が詠まれたので、女はこのように（お詠み申して）、の意。「かく」は、直後に置かれる女の「よとともに」の詠歌を指す。

28・よとともにぬるとは袖を思ふにものどかに夢を見る宵ぞなき　女の返歌。「よとともに」の「よ」は「世」と「夜」の掛詞になっており、夜ごと夜ごと常に常に、といった語感である。当夜を皮きりにして「夜」を連ねんとする内意を滲ませる宮詠の表現と切り結んで、それを直ちにみごとに切りかえすに十分な初句であると評せよう。「ぬる」は「寝る」と「濡る」の掛詞。諸注、故宮への思いを暗に示して、宮の誘いを拒否すると指摘するが、本稿もこれを踏襲する。宮が新しい関係を求めたのに対して、未だに女は故宮追慕の思いに沈んでいる。故宮に対する二人の認識にはっきりと変化と乖離とが出来しており、故宮の役割が終局に向かう前兆と押さえなすこともできよう。なお、はかなさの象徴である「夢」を共有する点では二人の緊密な心の交流が見られるやり取りと言えなくもないが、宮が共寝の夢を希求したのに対して、女が強調するのは、あくまでも独り寝のそれである点は、やはり見逃すべきではあるまい。

29・まいて」と聞こゆ。「まいて」は、「まして」のイ音便形。その下に故宮の一周忌が近づいたことを読む【大系】の説もあるが、【全講】の「前歌で『夢をみるよひぞなき』―寝ていない―をうけて、『まして今夜二人で寝ることはとてもできない』というのであろう」との把捉に従う。ただし、このあとの宮の動静に鑑み、女の拒否が言葉どおりの拒否として受け取られたのかどうか。女の言葉が言い指しのかたちであったことで、それが宮に自身の希求するままの行動に出る余地を与えたと読めば、その意味では、新たな展開をもたらすズレを描いた興味深い箇所であると捉えられよう。

（金井利浩）

（5）　かろがろしき歩きなど

〔本文〕

[1]かろがろしき歩きなどすべきにもあらず、情けなくは思すとも、と思して、「[2]まことにもの恐ろしきまでこそ思ゆれ」とのたまひて、[3]やをらすべり入りたまひぬ。[4]いとわりなき心地すれど、[5]言ふかひなきことを言ひちぎりて、明けぬれば帰りたまひぬ。

[6]「今の間はいかが」と、「あやしくこそ」とて、

[7]恋と言へば世の常のとや思ふらむ今朝の心はたぐひだになし

[8]御返し、

[9]世の常のこととともさらに思ほえず初めて物を思ふ身なれば

[10]と聞こえても、なほあやしかりける身かな、こはいかなることぞ、とあはれに、[11]故宮のさ*ばかりのたまひしものを、と悲しう、思ひみだるるほどに、[12]例の童来たり。[13]御文やあらむ、と思ふほどにさもあらねば、心憂し、と思ふほどもすぎずきしや。[14]帰りまゐるに、

[16]待たましもかばかりこそはあらましか思ひもかけぬ今日の夕暮れ

[17]宮御覧じて、げにいとほしう、と思せど、[18]かかる御ありきさらにせさせたまはず。*[19]北の方も例の人のやうにこそおはしまさねど、[20]夜毎に出でむはあやしと思しぬべし、故宮の御果てまではいたう謗られじ、と慎むも、[21]いとねんごろに思さぬにぞ。

（【臨川】六オ～七ウ／一四三～一四四頁）

〔校訂〕＊さばかり―（京）「御許」の「御」は「さ（佐）」の誤りか。朱で「ゆるし」の訓があるが、（書）「さばかり」に拠り改める。

＊せさせたまはす―（京）「させたまはず」を「せ」の脱落とみて「せさせたまはず」に改める。三条西本ほか「せさせたまはず」。

〔応永本校異〕（京）御許（朱・ゆるし）―（書）さはかり

〔三条西本〕【清水】17～19頁　〔参考〕【本文篇】八～一〇頁・【本文集成】52～67頁

〔和歌他出〕9「恋といへば」歌―『和泉式部集Ⅳ（松井本）』六五　10「世の常の」歌―『和泉式部集Ⅰ（正集）』八六八、『和泉式部集Ⅳ（松井本）』六六　11「待たましも」歌―『和泉式部集Ⅰ（正集）』八六九

〔現代語訳〕

軽々しい出歩きなどできるわけではない、（この人が）思いやりがないとお思いだとしても、とお思いになって、「（このまま廂にいるのは）ほんとうに恐ろしいまでに思える」とおっしゃって、そっと簾の内へすべり入りなさった。とても理不尽な心地がするけれど、（宮は）言ってもしかたのない、あてにならない契りの言葉を言って、夜が明けて日が変わるとお帰りになった。（後朝の文には）「（あなたは）今は、どんな気持ちなのか」とあり、また、「（私は）不思議なほど恋しくてたまらない」とあって、

恋というとありきたりのことと思うだろうが（あなたと違い）今朝の私の恋しい気持ちは他に比べようがない

御返事に、

ありきたりなどとはまったく思えないわ、（あなたのせいで）初めて恋のもの思いをする私だもの。

と申しあげても、やはり奇妙で見苦しい（私の）身の上だなあ、これはどうしたことなのか、としみじみ思いめぐらし、故宮があれほどおっしゃったのに、と悲しくてさまざまに思いみだれるうちに、いつものように童が来た。

宮の御文があるだろうか、と期待するうちにそんな様子でもないので、つらい、と思うのも、すきずきしいことよ。

宮のもとに帰参する童に、

（私は待ってなんていないけれど）もし文を待っていたとしてもこれほどではないだろう。思ってもみなかった、（あなたに逢えない）夕暮れがこんなにつらいなんて。

宮は御覧になって、ほんとうにかわいそうに、とお思いになるが、このようなお出かけはまったくなさらない。

北の方もふつうの人の様子でこそいらっしゃらないが、毎夜毎夜出ていくのは、なにをしているのかおかしい、とお思いになるにちがいない、故宮の一周忌のあけるまではひどく非難されないでおこう、と行動を慎しむのも、（女を）それほどには大切にお思いでないのだ。

〔注釈〕

1・かろがろしき歩きなどすべきにもあらず、情けなくは思すとも、と思して、「かろがろしき歩き」は、軽率な出歩き。親王である宮の立場では、気軽に出歩くことはできない。無理をして女のもとを訪ねた宮は、女が自分の行動を情け（相手への気遣いや思いやり）がないと思うことをわかりながら、女と情をかわすために、簾の内に侵入する。来訪の困難な自己の立場をあらためて確認し、簾の内への侵入を正当化する。底本では、「思すとも、と思して」となっており、心内文で女に対する敬語が使われているのは、不自然なようではあるが、宮が女に心理的な引け目を持っていることを表わすか。なお、三条西本には、「と思して」がなく、「かろがろしき」から「思ゆれ」までが宮の会話文となっている。

2・「まことにもの恐ろしきまでこそ思ゆれ」とのたまひて、宮は、廂の間に一人座している状態を恐ろしく感じる、と訴えて、簾の内に入る口実とする。宮は、先に「古めかしう奥まりたる身なれば、かかる所などには通ひならはぬを。いとはしたなき心地もするかな。その、おはする所に据ゑたまへ」と女に要求している。「かかる所」は、女に通された廂の間の妻戸の辺り、「そのおはする所」は、簾を隔てて女のいる母屋の端であろう。諸注、「もの恐ろしきまで」を、女への恋情の激しさをいうとするが、【大系】【学術】などは、該当する用例のないことを指摘し、恐怖を感じさせる状況についていう言葉とする。従いたい。「日暮るれば下葉木（こ）暗き木のもとのもの恐ろしき夏の夕暮れ」（好忠集・一一九・四月をはり）を引くか。

3・やをらすべり入りたまひぬ。「やをら」は、そっと、しずかに。宮は、女のもとに乱暴に闖入したわけではない。しかし、宮の進入に女の同意があったわけでもない。

4・いとわりなき心地すれど、「わりなし」は、道理に合わない、理不尽な様をいう。宮の簾の内へ入ってきた行動に対する、女の気持ち。女は、宮の強引な行動を理不尽だと感じるが、二人の身分の差を考慮すると女は受け入れるしかない。宮との初めての交情を、宮の一方的な行動の結果として位置づける。女が宮を招き入れたのではない。語り手は、女をあくまでも宮に対して受け身であったと位置づける。

5・言ふかひなきことを言ひちぎりて、明けぬれば帰りたまひぬ。「言ふかひなきこと」は、言ってもしかたのないこと。宮は、女の「わりなき心地」をわかるからこそ、将来を誓う言葉をかけることで、自分の情愛の強さを訴える。宮は、「言ふかひなきことを言ひちぎりて」と、熱心に約束の言葉をかけることで女への熱情を示す。しかし、女の側からすれば、閨での宮の言葉が守られる可能性は低い。宮は、将来に期

待の持てない「言ふかひなきこと」を言っているにすぎない。底本では「言ひちぎりて」に敬語がないが、文末の「帰りたまひぬ」で敬意が表されている。三条西本は「いとわりなきことどもをのたまひちぎりて」とする。「のたまひ」は、宮に対する敬意。「わりなき」は、宮の言葉についての修飾語となる。宮の約束の言葉は、その内容が「わりなき」であるのはもちろん、約束すること自体が「わりなき」ことである。尊貴な宮が何を言った所で、身分の低い女との将来が約束されるわけではない。「明けぬれば帰りたまひぬ」は、宮が明けるとすぐに帰ったことを言う。「明けぬれば」は、前日の夜が明けて日付が変わってしまったので、意。当時の日付変更時点は寅の刻（午前三時頃）。「明く」は、日の出の頃を言う現在の「夜明け」ではなく、前日の夜が終わって新しい日が始まることをいう。夙く橋本万平「日の境界と日付」・「江戸時代以前の時刻制度」『日本の時刻制度　増補版』（塙書房一九七八、初版一九六六）に指摘がある。その時刻になると、男は帰るのが通常。小林賢章「動詞「明く」が持つ重要な意味」『「暁」の謎を解く　平安人の時間表現』（角川学芸出版・二〇一三）などを参照。

6・「今の間はいかが」と、「あやしくこそ」とて、　宮の後朝の文の言葉。三条西本は、「今のほどもいかが。あやしうこそ」とする。応永本は、女の気持ちを問う部分と、自分の思いを訴える部分とを分けて、両者の違いを明らかにしたか。宮は、「今のあなたの気持ちはどうだろうか」と女の気持ちを想像してみせた上で、自分は「不思議なくらい、気になって仕方がない」と言い送ることで、女への自分の思いの強さを印象づけるのである。

7・恋と言へば世の常のとや思ふらむ今朝の心はたぐひだになし　宮から女への後朝の贈歌。上の句は、女の「恋」への思いを宮が推測する。下の句は、推測した女の「恋」の感覚とは異なる、宮自身の特別な情交の翌朝の心情を訴える。「世の常」は、世の中にありきたりのこと。女について、恋をありきたりと思うだろうとすることで、女の恋愛経験の多さを指摘する。その上で、女と違って自分の恋情は、他に類例のない特別のものであると訴える。なお類歌に「恋といへば同じ名にこそ思ふらめいかでわが身を人に知らせむ」（拾遺集・六七七・恋一・よみ人知らず）、「いへば世の常のこととや人は見む我はたぐひもあらじと思ふを」（重之女集・八九・恋）がある。特に重之女歌は、表現が多く類似する。渦巻恵「『和泉式部日記』成立論試論」（「日本語と日本文学」46、二〇〇八・2）は、重之女歌との類似から、日記作者による宮歌「恋といへば」の創作の可能性を示唆する。

8・御返し、　「恋といへば」への返歌、次項の女の歌「世の常の」を指す。

9・世の常のこととともさらに思ほえず初めて物を思ふ身なれば　女の返歌。上の句は、宮歌の上の句の発言内容を否定する。ただし、これだ

けでは、贈歌に対する切り返しとしては、単純に過ぎるか。下の句は、宮歌の「たぐひだになし」を受けて、自分は「はじめてものを思ふ身」であるという。女は、自分には「たぐひ」の有無の判断もつかない、と主張する。ここで、答歌としての切り返しが成立する。女は、「はじめてものを思ふ」自分に対し、「たぐひ」を持ち出すあなたはけっしてはじめての恋ではない、と対抗するのである。と同時に、あなたによって私ははじめて恋の物思いをした、とも言っていることになる。ここには、新たな恋に真剣に向かいあう女の「ものを思う身」がある。「身」すなわち、宮と関係を結んだ女自身である。三条西本は、第五句を「思ふあしたは」とする。宮の「今朝の心」を踏襲することになり、理解しやすいが、切り返しとしては、弱くなってしまう。いずれにしても、女は、宮の贈歌に切り返すように歌を返しながら、宮との一夜を過ごすことで「はじめてものを思う」のだ、と宮への後朝の恋情を伝えている。

10・と聞こえても、なほあやしかりける身かな、こはいかなることぞ、とあはれに、「あやし」は、不思議だ、奇妙だ、見苦しい、などの意。女は、故宮の弟である帥宮と情交を持った自分自身について、通常のあり方とは異なる見苦しい存在とする。「身」は、身の上。助動詞「けり」は、自分の身の上のあやしさにいま改めて気づいたことを示す。「こはいかなることぞ」は、かつて故宮と情を通じ、いまその弟宮と情を交わすことになった自分の身の上についての自答。「あはれに」は、故宮との関係を想起しての感懐。

11・故宮のさ*ばかりのたまひしものを、と悲しう、思ひみだるるほどに、「さばかり」は、底本は「御許」とする。「御」は「佐」の誤りと見てよいか。とすれば、「さばかり」と訓むことが適切だろう。「さばかり」であれば、あれほどおっしゃったのに。具体的には、【学術】【中嶋】のいうように、「他の男と逢うな」というような内容の言葉かも知れないが、確定はできない。「「なほ……」とあはれに」と「「故宮の……」と悲しう」とは、対句的表現。宮への恋情と故宮への追慕との間で「思ひみだるる」女の心情を、「あはれなり」と「かなし」で表現する。

12・例の童来たり。「例の」は、「童来たり」にかかる連用修飾語。例によって、いつもの通り。前文に「かくしばしばのたまはするに御返しも時々聞こゆ」とあり。その間の文使いを童がしていたと推測しうる。童が宮の文を持って女のもとに来ることは、いつものことである。しかし、今回は、宮の文がない。童は宮の指示によって、女の様子を確認するために派遣されたのであろう。文を送らないのは、二夜続けての来訪をしないことの表明か。宮は、高い身分のため、人目を憚り女のもとを続けて訪れることは難しい。また、故宮の一周忌が近く、宮は行動を慎もうとする気持があるか。

13・御文やあらむ、と思ふほどにさもあらねば、心憂し、と思ふほども　女は、童の推参に宮の文を期待する。期待するのは、来訪を予告す

る文であろう（川村裕子「『和泉式部日記』の文と夕暮」『王朝文学の光芒』（笠間書院・二〇一二）。文の無いことを「心うし」と思う女は、すでに宮の想いを受け入れ、宮に好意を抱いている。

14・すきずきしや。　いかにも好色な様子を言い、好色な言動を非難する語として使用される。語り手の批評。ただ、その視点は女と重なる。女は、故宮への追慕と宮への恋情の間を揺れ動きながら、童の推参に宮の文を期待し、文の無いことに落胆してしまう。「すきずきしや」は、そうした女の心の動き全体を対象とする。「同じ枝に」歌を童に言付けた時の宮の言葉「かかること人に言ふな。すきがましきことのやうなり」と響きあう。宮も女も、故宮を意識しつつ、新しい恋に躊躇いつつ踏み出そうとしている。

15・帰りまゐるに、　宮の文の無いことをうけて、女は宮への文を童に託す。

16・待たましもかばかりこそはあらましか思ひもかけぬ今日の夕暮れ　「待たましも…あらましか」は、反実仮想。「待たましも」は、待っていないことを前提に「もし待ったとしても」という。女が待つのは、宮の来訪予告の文とそれに続く来訪。女は、宮の続けての来訪を期待できる身分ではない（【角川】）。「かばかり」は、第五句の「今日の夕暮れ」の心情を指す。「かばかりこそはあらましか」は、「これほどつらいものだろうか、いやそんなことはないだろう」。女は、実際は宮の文を待っていたが、待ってはいない、と強がりを言う。そのうえで、「思ひもかけぬ今日の夕暮れ」によって、宮と逢った翌日の夕暮れに宮と逢えないでいることのつらさを、訴える。宮の来訪を期待して待つことより、来訪の無いことが初めからわかっている「夕暮れ」がいっそうつらいと言うのである。【全講】「考説（一二）」が参考になる。

17・宮御覧じて、げにいとほしう、と思せど、　「げにいとほしう」は、本当にかわいそうに、の意。「いとほし」は、力の弱いものに対して同情する気持ちを表す。宮は女の歌を見て、女が自分の来訪を心から待っていることを知る。しかし、簡単には出かけることはできない。

18・かかる御ありきさらにせ*させたまはず。　「せさせたまはず」は、底本「させたまはず」。「せさせたまはず」の動詞「せ」が落ちたものと見なし、三条西本・寛元本によって「せ」を補った。「かかる御ありき」は、身分の低い愛人のもとを訪ねるような出歩き。女を訪ねることのみをいうのではない。宮は、女を気にかけながらも、立場上出歩くこと自体が困難なのである。

19・北の方も例の人のやうにこそおはしまさねど、　「北の方……おはしませねど」は、地の文。宮の心話文の「夜毎に……思しぬべし」を説明する挿入表現。「北の方も例の人のやうに…」の傍線部を、三条西本は、「例の人の仲」とする。「人の仲」では、夫婦仲のことになるが、応永本の「人」では、北の方の人柄に問題があったことになるか。だとすれば、宮と北の方との不仲、後の宮邸からの退去の原因が、女の宮

邸入りだけでなく北の方の人格にもあることを示唆する。歴史上の敦道親王の北の方は、藤原済時二女。『栄花物語』「初花」に、「（済時二女が）東宮の御弟の帥宮に聞えつけたまへりしかば、南院に迎へたまへりしかど、年月に添へて御心ざし浅うなり和泉守道貞が妻を思し騒ぎて、この君をばことのほかに思したりしかば、居わづらひて、小一条の祖母北の方の御もとに帰りたまひにしぞかし。」とある。なお、「和泉守道貞が妻」は、和泉式部のこと。また、『大鏡』「師尹伝」では、自分の意志で敦道親王と結婚して後に不仲になり、和泉式部の宮邸入りがあって「小一条に帰らせたまひにし後、この頃聞けば、心えぬ有様の、ことのほかなるにてこそおはすなれ。」と語られる。森田兼吉（「帥宮敦道親王／成人と結婚」森田『第二』）は、済時二女が後日、所領の回復を道長に訴えたこと（『大鏡』「師尹伝」）に触れ、「いくら落ちぶれていたとはいえ、ひどく非常識なふるまいであったことは確かである」と述べている。高貴の女性としては、異例の人物であったようだ。

20・夜毎（よごと）に出でむはあやしと思しぬべし、故宮の御果てまではいたう謗（そし）られじ、と慎（つつ）むも、 底本「そしられし」。敬語がなく、故宮の行動をいうと見ることはできない。宮の自制の決意とみて、「謗られじ」とする。「夜毎に……謗られじ」は、宮の心内語。「御果て」は、故宮すなわち為尊親王の一周忌をいう。宮は、北の方の思わくや故宮の一周忌を前に世間の悪評を気遣って、外出を控えたことになる。【新訳】は「一周忌まで」とする。「御果て」で諒闇あけを意味する例は多い。一例をあげる。「別納をば三の宮の御領にと思しめしたり。あしかるまじきことなれば、さやうに思しめしたれど、なほ御果てまではかうてやとぞ思しめしける。」（『栄花』いはかげ）。この「御果て」は、一条院（一条天皇）の一周忌をいう。為尊親王の忌日は、六月一三日。『和泉式部物語（日記）』に六月の記事のないことと関わるか。宮は、故宮の一周忌があけるまでは、非難されるようなことは慎もう、と思っている。金井利浩「『和泉式部日記』一面」『日記文学研究　第一集』（新典社・一九九三）は、夙く「御果て」が故宮の一周忌であることを指摘し、応永本本文によって開かれる読みの深化の可能性を指摘している。また、同様の趣旨を述べる菅原領子「和泉式部日記「故宮の御はてまでは」考」（「京都大学國文學論叢」3、一九九九・1）は、六月の記事のないことなどをあげて、敦道親王と和泉式部との交渉が、為尊親王の一周忌あけまで現実にも無かった可能性を示唆する。三条西家本では、「故宮のはてまでそしられさせたまひしも、これによりてぞかし」とある。「これ」は、女を指す。宮は、故宮が女のせいで世間から「はてまで」非難されたことを想起している。「はてまで」は、「死ぬ間際まで」の意となる。

21・いとねんごろに思さぬにぞ。 女の側に立っての語り手の批評。北の方や世間を気にする宮の女への情愛の浅さを言う。

（山下太郎）

（6）　暗きほどにぞ、御返りありける

〔本文〕

[1]暗きほどにぞ、御返りありける。

[2]ひたすらに待つともいはばやすらはで行くべきものを妹が家路に

[3]おろかにや思しめすらむ、と思ふこそ苦しけれ」とあれば、[4]ただ、「なにか、ここには」とて、

[5]かかれどもおぼつかなくも思ほえずこれも昔のえにこそあるらめ

[6]と思うたまふれば、慰めずは絶えむやは。露を」と聞こえたり。[7]おはしまさむと思して、日頃になりぬ。

[8]つごもりの日、女、

[9]時鳥よにかくれたる忍び音をいつかは聞かむ今日し過ぎなば

[10]と聞こえさせたれど、人あまたさぶらふほどなれば、御覧ぜさせで、[11]つとめて、持*てまゐりたれば、

[12]忍び音は苦しきものを時鳥こ高き声を今日よりは聞け

[13]とて、三日ありて、忍びて渡らせたまひたり。[14]女、物へ参らむとて精*進などしたるに、[15]いと間遠なる、御心のなきなめりと、情けなからじとばかりにこそとみれば、[16]ことに物なども聞こえで、仏にことづけて明かしつ。（【臨川】七ウ～八ウ／一四四～一四六頁）

〔校訂〕＊つとめて―（京）「つともく」を「つとめて」の誤りと見て改める。三条西本ほか「つとめて」。

＊持てまゐりたれば―（京）「もてさゐりたれは」を「さ（左）」と「ま（万）」の誤りと見て改める。

＊忍び音は―（京）「しのねは」を（書）「しのひねは」に拠り改める。三条西本ほか「しのひねは」。

＊精進―（京）「御うし」は「御」と「さ（佐）」の誤りと見て改める。（書）「さうし」。

〔応永本校異〕（京）いつかはきかむ―（書）いつかはきかぬん　（京）しのねは―（書）しのひねは　（京）御うし―（書）さうし

〔三条西本〕【清水】19～21頁　〔参考〕【本文篇】一〇～一二頁・【本文集成】67～81頁

〔和歌他出〕12「ひたすらに」歌―ナシ　13「かかれども」歌―ナシ　14「時鳥」歌―ナシ　15「忍び音は」歌―ナシ

〔現代語訳〕

暗くなる時分になって、お返事があった。

ひたすら待つとでもいうなら、ためらうことなく出かけて行くでしょうに、あなたの家に向かって。

わたしの気持ちをいいかげんなものかと思っていらっしゃるのだろう、と思うことがつらいのです」とあるので、（女は）ただ、「どうしてそのようなことを、わたしのほうは」とだけ書いて、

こうしてあなたの訪れがなくても、不安にも思いません。これも昔の宮様と同じ枝のご縁なのでしょう。

と存じ上げているので、慰めていただかないからといって、命が絶えることなどありましょうか。露のようなわが身ですが」と申し上げた。帥宮は女のもとへおいでになろうとお思いなさり、そうして何日か過ぎてしまった。

月の終わりの日、女は、

時鳥が世に隠れて夜にひっそりと鳴く忍び音を、いつ聞くことができるでしょうか。（四月晦日の）今日という日が過ぎてしまったら。

と申し上げさせたけれど、宮様のもとには人が大勢伺候していた折りなので、お目にかけないで、翌朝、（女の手紙を）持って伺うと、

忍び音というものは苦しいものですよ。時鳥が高々と鳴く声を（五月一日の）今日からはお聞きください。

とお返しになり、三日たってから、人目を忍んでお出ましになった。女は、寺に参詣しようと思って心身を清めている間に、ひどく間遠であるのは、ご愛情がないようだと、せいぜい薄情にはすまいという程度のお気持ちなのだと思うので、ことさら物も申し上げないで、仏にかこつけて夜を明かした。

〔注釈〕

1・暗きほどにぞ、御返りありける。　暗くなった時分に、ご返信があった。宮が初めて来訪する際には、「暮れにはいかが」、「暮れには思ひかけぬにしのびて行かむとおぼして」と、「暮れ」が強調されているが、来訪のあった翌日の「暮れ」までに宮からの音信がなかった。再訪が期待できないと知った女は、「思ひもかけぬ今日の夕暮」と訴えた。しかし「暮れ」の時間はすぐに過ぎ、暗くなった時分にやっと返信が

届いたのである。【新書】は「遅く返歌するのは、宮の心の動揺を暗示している」とする。一方、「夜闇の音信は、来訪のつもりがないことの改めての意思表示」とも解せる（秋澤亙「『和泉式部日記』における和歌贈答の挫折」『王朝女流日記を考える』武蔵野書院・二〇一一）。

2・ひたすらに待つともいはばやすらはで行くべきものを妹が家路に　初二句は、「一途に待つとでも言うのなら」の意。女が「待たましも」と反実仮想を用いて屈折した「待つ」気持ちを詠んだのに対し、同じく仮定法を用いながら切り返した。三条西本は、初句「ひたぶるに」。伊藤『伝本攷』によると、平安時代、特に散文においては「ひたすら」より「ひたぶる」の用例数が圧倒的に多い。『和泉式部集』では「ひたすら」を含む歌は六首。「田守る家に、人ゐたる所／ともすれは引き驚かす小山田のひたすらいねぬ秋の夜な夜な」（Ⅰ・一一六／Ⅱ・五二八）。「ひたぶる」は一首のみに見られる。第五句の「妹」は、男性が妻や恋人を親しみを込めて呼ぶ万葉語。「背（せ）」の対。平安時代には、古風な表現としてもっぱら和歌に用いられた。応永本本文中、相手を呼ぶ呼称としては「君」が23例。「妻」が3例。「妹」はこの一例のみ。「妹が家路に」と詠む歌に「来てみよと妹が家路に告げやらむわがひとり寝るとこなつの花」（後拾遺集・二二七・夏・曾禰好忠）がある。宮の歌の「行くべきものを」は、この好忠歌の「来てみよと」を詠み換えているように思われ、注目される。ただし、三条西本は「君が家路に」。

3・おろかにや思しめすらむ、と思ふこそ苦しけれ」とあれば、　「おろか」は、冷淡、いいかげん。「思しめす」は、宮の、女に対しての尊敬表現。三条西本・寛元本は「思しめすらむ」を欠く。ここは、宮が女と関係を持ったにもかかわらず、その後の訪れをためらっている後ろめたさから、こうした敬意を示す表現を用いたとも考えられよう。なお、底本には「と思ふこそ……」という言い回しが他に二か所あり、いずれも帥宮の言葉の中に見られる。渡辺開紀「『和泉式部日記』諸本論の一視点」（中古文学会・二〇二二年度秋季大会・口頭発表、二〇二二・10）は、宮が女に対し、へりくだった際に使う点が特徴的であると述べている。

4・ただ、「なにか、ここには」とて、　宮が女の薄情を責めるのに対し、女は、そのような気持ちではない、と返事をする。「なにか」を「なにかあらむ」の略とし、「何でもありません」（【竹野】）、「どういたしまして」（【新註】など）と解することもできよう。「とて」は、「と書いて」。三条西本、寛元本は、「ただ」「とて」を欠く。そのため、「なにか、ここには、かかれどもおぼつかなくも思ほえず」と言葉と歌が直接つながる。こうした流れを、遠藤『新講』は「歌文融合」と指摘する。

5・かかれどもおぼつかなくも思ほえずこれも昔のえにこそあるらめ　第四句の「これ」は、上句「かかれどもおぼつかなくも思ほえず」を

指す。不安に思わないこと、の意。「昔のえにこそあるらめ」の「えに」は、「縁（えに）」と「枝に」の掛詞として解した。冒頭部の宮の歌には「同じ枝に」とあった。その「枝の縁」ということ。こうして訪れがなくても心細く思わないのは、昔の、同じ枝に鳴いていたという縁ゆえであろう、と詠み返したのである。ちなみに、「縁」は、和歌においては「江に・枝に」と掛詞で詠まれるのが常である。「かち人の渡れど濡れぬえにしあれば」（『伊勢』六九段）や、「秋かけていひしながらもあらなくに木の葉ふりしくえにこそありけれ」（『伊勢』九六段）、「かばかりもとひやはしつる時鳥花橘のえにこそありけれ」（道綱母集・二九）、「水鳥のはかなき跡に年を経て通ふばかりのえにこそありけれ」（後撰集・八三六・恋四・詠み人知らず／古今六帖・一四七一）、「みづのえ／ゆく水のえにだにあらば富士川のながれて人にすまざらめやは」（好忠集・四五九）、「夕露に紐とく花は玉ぼこのたよりに見えしえにこそありけれ」（『源氏』夕顔）、「みをつくし恋ふるしるしにここまでもめぐり逢ひけるえには深しな」（『源氏』澪標）。「縁」を掛詞なしに詠む例は、検索しえなかった。したがって、当該歌も掛詞として解釈すべきであろう。なお、「昔の縁」とは、故宮との縁をいうと思われるが、【学術】は、「歌の詠まれた場を中心に考えた場合、最初の音信の時ならともかく、自分の現在の恋人に贈る歌に「亡き宮からの縁」と正面切って持ち出すのは、いかがであろうか」とし、「前世からの宿縁」として、裏意としてほのかに「故宮」をきかせたと注す。【ほる】も「前世の因縁」とする。しかし、本作に用いられる「昔」は、すべて故宮と交際していた頃を指す。ここは、故宮の存在が、「橘」や「昔の人」「昔の縁」といった歌ことばを引き出してくるものと考える。秋澤亙「「ゆかり」の文学としての『和泉式部日記』」（「活水日文」35、一九九七・12）は、帥宮が故宮の結縁、「ゆかり」であるために、「帥宮を得たことで、「女」の心から故宮が速やかに消えていく」と、故宮追慕の情が急速に希薄になることについて論じる。

6・と思うたまふれば、慰めずは絶えむやは。露を」と聞こえたり。 底本「とおもふたまふれはなくさめすはたへむやはつゆを」を「と思うたまふれば、慰めずは絶えむやは。露を」と校訂した。「おもふ」は、「おもひ」のウ音便形「おもう」が「おもふ」と表記されたもの。「たまふれ」は、下二段活用の助動詞で、自己卑下の意を表す。「慰めずは」以下は、諸注が引くように「女のもとより、いといたくな思ひわびそと、頼めおこせて侍りければ／慰むる言の葉にだにかからずは今も消ぬべき露の命を」（後撰集・一〇三一・恋六・よみ人しらず）を踏まえた表現。『後撰集』のこの歌は、「慰めの言葉がないなら、露のような命が今にも消えてしまいそうだ」という意。そこで、底本「たへんやは」に、試みに「絶えむやは」の字を当てて解した。「露を」の「露」は、はかない露のような命のことをいうのであろう。「を」は、間投助詞の文末用法。ここは、古歌を引きながら、歌意を反転させ「慰めの言葉がなくとも、こちらは、命が絶えることなどない。露のようなも

のだけれど」と強がって見せたと解釈できよう。ただし、【竹野】【詳解】【新註】【川瀬】【講談】【学術】【完訳】は、「たへ」に「堪へ」の字を当て、「慰めの言葉がないなら堪えられない。露のような命は消えてしまうだろう」という意に解している。歌では不安ではないと強がったものの、そうはいっても堪えられない、と女の弱さを見せているということになり、気持ちのぶれをそのまま宮に伝えたことになる。なお、三条西本は「と思ひたまふれど、慰めずはつゆ」とあり、底本の「たへむやは」の部分を欠く。【学術】は、「慰めずは……」の言葉が、帥宮の「語らはば慰むことも……」の歌に呼応するものとして「宮の心にあの日の歌を想起させるねらいをも持つと見るべきであろう」と指摘する。

7・おはしまさむと思して、日頃になりぬ。　女の文を見て、宮は、行こうと思ったが、そのまま日にちが経ってしまった。三条西本では、「おはしまさむとおぼしめせど、うひうひしうのみ思されて、日頃になりぬ。」の叙述があり、何日か女のもとを訪れなかった理由として、宮が「忍ぶ恋」の関係を「うひうひし」、つまり、なんとなく気が進まず、億劫になったためであると解釈されている（【考注】・尾崎知光「「うひうひし」と「よだけし」の語義について」（『愛知県立大学説林』60、二〇一二・3））。応永本ではそれがないため、訪れようと思いつつも行けなかった原因を、当該場面の前にあった北の方の存在や、故宮と女の仲を思い返していたことを引きずり、女の訴えを受けても踏み切れずにいると解することになる。寛元本には「うひうひしうのみおぼしめされて」の後に「日頃になりぬ」の箇所がない。つまり、宮の「おはしまさむ」という思いの余韻を残したまま「つごもりの日」に続き、場面が切り替わる。その間に女のもとに行かなかったことは、明確にはされない。

8・つごもりの日、女、「つごもり」は「月籠り」の略。作品は四月の起筆であるので、四月末日のこと。月が変わるまで、来訪も音信もなかったことを受けて、女は宮に文を送った。

9・時鳥よにかくれたる忍び音をいつかは聞かむ今日し過ぎなば　時鳥の声に託して、宮の来訪を待ち望む歌。冒頭の「薫る香に……」「同じ枝に……」の贈答歌を踏まえ、今日でなければいつ声が聞けるのか、と宮に訴える。時鳥は、陰暦四月に南方より飛来する夏の鳥で、『古今集』夏部の冒頭には「わが宿の池の藤波咲きにけり山時鳥いつか来鳴かむ」（一三五・よみ人しらず）とその鳴き声を待ち望む歌が配される。また、「五月来ば鳴きも古りなむ時鳥まだしきほどの声を聞かばや」（古今集・一三八・夏・伊勢）、「五月の初めの日になりぬれば、例の大夫／うちとけて今日だに聞かむ時鳥忍びもあへぬ時は来にけり」（『蜻蛉』下巻、天延元年五月）とあるように、時鳥の忍び音は、四月なら

ではのもの。四月末日を過ぎたら、「古声」になってしまうのだから、今日その声を聞きたい、今日お逢いしたい、という思いを歌にして宮に贈るのである。「よに」は、世間の意の「世」に「夜」を掛ける。【詳解】【新註】【考注】【講談】【今井】は、「忍び音」を「内々のお便り」とするが、「世を忍ぶ逢瀬」を暗にいうのであろう。また、【集成】は「忍び音」の「ね」に「寝」を掛けるとするが、「声を聞く」ことが贈答の主眼なので採らない。さて、こうした女の方からの贈歌について、鈴木一雄「源氏物語の和歌」（「国文学　解釈と教材の研究」一九六八・5）は、本作品における女からの贈歌には、女からの積極的な働きかけが看取されるとともに、女の心の不安と緊張が強調され、二人の関係の危機が暗示されているとする。一方、高木和子「『和泉式部日記』の物語的虚構化の方法」（「日本文藝研究」二〇〇四・12→『女から詠む歌』（青簡舎・二〇〇八）は、「一対の贈答歌が二ヶ月にわたっている、という趣向自体に妙味があるやり取りである」「典型的に呼吸の合った一対をなしている」とし、女からの贈歌が、作品としての虚構化のために再構築された可能性を含むことを論じる。

10・と聞こえさせたれど、人あまたさぶらふほどなれば、御覧ぜさせで、「時鳥」の歌は、四月つごもりの日に届けられてこそ、女の意図に沿う。しかし、小舎人童は、宮を囲む人の多さに届けることができなかった。

11・つとめて、持*てまゐりたれば、底本「つともくもてさいりたれは」とあるのを他本により校訂した。「つとめて」には、その日の早朝という意味と、翌日の早朝の意がある。ここは翌朝。月が改まった五月一日の朝。

12・忍*び音は苦しきものを時鳥こ高き声を今日よりは聞け「こ高き声」の「こ」は接頭語。宮は、「四月末日の今日お逢いしたい」という女の思いに応えられずに、一日遅れてしまったので、「五月になった今日からは、忍びの恋でなく、堂々と交際しよう」と歌で宣言する。時鳥の声は、「音羽山こ高く鳴きて時鳥君が別れを惜しむべらなり」（古今集・三八四・離別・貫之）のように、高らかに響くものとしても詠まれる。上三句については、「少輔の内侍に物言ひ初めて侍りしを、いみじう忍ぶと聞きはべりしかば／忍び音も苦しきものを時鳥いざ卯の花のかげに隠れむ」（実方集・二五〇）と重なる。実方歌は、忍び音も苦しいから、時期が来るまでは卯の花の陰に隠れて鳴かずにいようという発想の歌。竹鼻績『実方集注釈』（貴重本刊行会・一九九三）は、実方の歌について「人目を忍ぶ恋人を忍び音に鳴くほととぎすに譬える発想は、平凡のようではあるが、実方以前にはあまり類例がないようである」と指摘している。実方は中古三十六歌仙の一人。長徳四（九九八）年、陸奥守在任中に亡くなっている。宮の歌がこの実方歌に拠るとは断言できないものの、忍ぶ恋を忍び音の苦しさに喩える歌は、他には近世まで見られないことから、留意されよう。

13・とて、三日ありて、忍びて渡らせたまひたり。　四月末日、五月一日と暦をたどる贈答の後、「三日ありて」と日にちを追って記される。三条西本・寛元本は「二三日ありて」。宮の返歌には、「五月一日の今日からは忍ぶことはすまい」とあったのに反して、「今日」ではなく三日後に、忍んでの訪れであった。「三日」と日にちを明確にすることにより、宮の不誠実さがいっそう強調される。【全集】【完訳】は、和歌と実際の宮の行動の落差について、ユーモラスな皮肉ととらえるが、【平田】は、「和歌独自の、散文とは異なった機能を考えるとここは誇張とまでは言えず、まして宮の不誠実を言うのは当たらない」と見解を異にする。

14・女、物へ参らむとて精進*などしたるに、　一周忌である六月十三日当たりの式部の動向は書かれておらず、また、石山などのゆかりの寺でなく「物へ」とぼかしている点を鑑みると、寺参りのための精進であろう。為尊親王追懐のためか（【ほる】）。

15・いと間遠なる、御心のなきなめりと、情けなからじとばかりにこそとみれば、　「間遠」は、織り目や編み目の粗いことから、隔たりがあるさまをいう。特に、男女の間柄の疎遠なさまを意味することが多い。「須磨のあまの塩焼き衣をさを荒み間遠にあれや君が来まさぬ」（古今集・七五八・恋五・よみ人しらず）。ここは、宮の最初の訪問から十日ほどの期間。間遠である理由を「御心なきなめり」「情けなからじとばかりにこそ」と推察する。「情けなし」は、わきまえ、たしなみがないこと。そうしたふるまいはすまいという程度の気持ちであるために訪れが間遠だとも思うのである。「情けなからじとばかりにこそ」を三条西本は欠く。岡田貴憲「『和泉式部日記』異本の一様相」（『日本文学ジャーナル』22、二〇二二・6）は、本作品十月の条で宮が女を「情けなからず」と評するのと比較しながら、この部分を有する応永本・寛元本による分析を試み、女と宮とが用いる「情けなし」の度合いに齟齬がある点を指摘している。

16・ことに物なども聞こえで、仏にことづけて明かしつ。　ことさら何も申し上げず。心の内では宮の訪れを待望しながらも、ここでことさらに会話を拒むのは、女の駆け引きであろう。宮の不実を責めるでもなく、素直に宮の訪問を喜ぶでもなく、女は宮を拒絶することで、軽々しく扱っていい女ではないことを示し、恋愛の駆け引きにおいて優位に立とうとする。

（渦巻恵）

付記　本稿は、國學院大學北海道短期大学部開講科目「日本文学演習B（担当・渡辺開紀）」ならびに「和泉式部日記分科会」（日記文学会主催・代表金井利浩）における議論を基とする。各項目の分担と担当範囲、および執筆者名は次の通りである。

①〔本文（確認）〕〔応永本校異〕〔三条西本〕〔参考〕〔和歌他出〕

荒井春紀、伊藤海斗、川端莉子、斉藤愛唯、清水湧斗、谷口真矢、中澤悠茉、本間修自

（以上、「日本文学演習Ｂ」受講者・国文学科２年）

②〔本文（作成）〕〔校訂〕〔現代語訳〕〔注釈〕

1「夢よりもはかなき世の中」…渡辺開紀　2「あはれにものを思ふほどに」……渡辺開紀

3「端におはしますほどに」……松島　毅　4「暮れには思ひかけぬに」……金井利浩

5「かろがろしき歩きなど」……山下太郎　6「暗きほどにぞ、御返りありける」…渦巻　恵

①の項目に対する誤謬・遺漏がある場合、その責めは指導の任にあたった渡辺にある。また②の項目については、「凡例」に対する不備や〔注釈〕間に齟齬が生じないように議論に努めたが、最終的には執筆担当者の各々の判断によって稿を為した。こうして成ったのが本「注釈稿」であることをお含みおきのうえ、大方のご批正を乞う次第である。さらに、近時、岡田貴憲『平安仮名日記本文考』（武蔵野書院・二〇二三）が刊行されたが、入稿後の段階であったために、本稿に反映できなかった点、ご理解を賜りたい。

（「付記」文責・渡辺開紀）